

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

フィリップ・ブオナローティ 著

田 中 正 人 訳

目 次

凡 例
序 言

第一章 革命の諸局面——テルミドールまで

以上、一六九号

第二章 平等派——パンテオン・クラブの創設と解散（その一）

以上、一七〇号

第三章 平等派——パンテオン・クラブの創設と解散（その二）

第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その一）

以上、一七一号

第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その二）

以上、一七二号

第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その三）

第四章 蜂起に向けて——警察隊の叛乱、そして山岳派との提携

以上、本号

第五章 蜂起直前——情勢判断と戦術会議

以下、続載

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その3）

証拠書類 一三

護民官グラッキュス・パプーフへ⁽¹⁾

共和暦第四年ブリュヴィオーズ三〇日（一七九六年二月一九日）

私もまた、実質的な平等が望みなのですが。もうすぐ私は六〇歳台になりますが、財産はまったくと言っていいほどありません。私は働くにはまだ若すぎる六人の子を抱えています。不幸にも私には何ひとつ手に職がありません。私は、商人でも仲買人でも投機師でも銀行家でもありませんし、また事務員でさえありません。ですから、実質的平等を待ち望む差し迫った理由はどれほど多いことでしょう。けれども何と残念なことでしょう。実質的平等は可能なのでしょうか。いつになるとも分らないきわめて遠い先のことで、いつの日にか達成されることはないとあきらめている、こうした至福状態を私に提示することが何の役に立つのでしょうか。どのようにしてその至福状態を出現させるのでしょうか。いつも言葉だけで、現実は一度も存在していません。

私は農地の分割〔第二章訳注〔50〕〔59〕を参照〕があったということを讀んだことがあります。しかしそれは長くは続きませんでした。なぜでしょう。この点を掘り下げる必要があります。

つまり、分割だけが問題なのではなくて、分割が長続きすることも大事なのです。

また農地だけが分割すべきすべてではありません。私は、修道院ないしそれに類似した場所を除いて、知性や発

明の産物が分割される試みなりともあった、ということはどこでも読んだことがあります。私たちは小さな共同体〔修道院〕(communaute)に分割されるのでしょうか。そうなると想定し、そして、例えば私が隣人の靴直しと連れ立って、肉やパンやリキュール等々の正確に平等な割り当てを受け取るために、自分で描いた魅力的な絵、私の完璧な機械、素晴らしい発明品、物理学や化学や水利術や博物学の面でのさまざまな発見、私の詩、私の作曲した楽譜、ヴァイオリンやハーブやクラヴサンを流れるように弾く私の腕前、快い私の声音等々を、実質的平等社会のよろず屋に持っていく事態を想い描いてみましょう。それでもこれですべてなのではありません。それが長続きしなければなりません。それが趣味や天才への、そして美と技芸の完成とへの情熱を消滅させるようなことがあってはなりません。けれども私が、隣人の靴直しとの実質的平等のために修道士のように自分のきわめて心地よい趣味や好みを犠牲にすることができると想定してみましょう。うわべを取り繕っても現実是不変でない以上、上長者、修道院長、大修道院長、執行役会〔総裁政府 directrices exécutifs〕等々が必要となるのではないのでしょうか。さまざまな法が、つまりお互いの間でのさまざまな協約が必要となるのではないのでしょうか。いつも予め考慮に入れないといけない、ロースト用回転器のおもりと同じくらい、あるいは時計のぜんまいと同じくらい正確に計算しなければならない、反作用に対して働く等しい力を、完全に公平無私な指導者たちに託す必要が生じるのではないのでしょうか。ここではどれほど多くの意見が姿を見せてくるのでしょうか。

私は、J・J・ルソーやマブリが引用されるのを耳にしています。前者はまさに、純粹な民主政のもとで生きるには、神人でなければならぬ、と述べました。後者は、わが国のような、広大で人口の多い国においては、実質的平等の可能性など信用していません。そのことを考えると、しかも何度も何度も考えると、私の頭は混乱し、訳がわからなくなってしまうのです。

護民官よ。われわれに計画を提示してください。われわれに実質的平等の可能性と、それが長続きすることとを証明

してください。そしてそれにたどり着く手段を、つまり、何年間も秩序破壊に陥ることがなく、また、いろいろと運動し、悲痛で無用の犠牲を払った後に、現在よりもひどい目に遭うようなことがないことを、正確に示してください。

署名 M・V

原注

(1) 本文中で問題とされている書簡「証拠書類 一三(続き)」は、この書簡への回答であった(この書簡の初出は確認できなかった。以下「証拠書類 一三」に属する四点の資料および「証拠書類 一四」は、前号掲載部分に関連するものであるが、紙幅との関係で今号に収録することとなった。読者には若干ないしかなりの不自由をおかけするが、了とされたい)。

訳注

(1) ルソー『社会契約論』第二編第七章「立法者について」を参照。

(2) 大規模な国家においての平等社会の実現性についての直接的な言及ではないが、マブリは財産共同体の実現について悲観的であった。「最も幸福な時代なら、立法者がなしえたことを、今日では積もりつもった悪徳と偏見が不可能にした」(岩本勲『フランスにおける革命思想』一九七八年、晃陽書房、四二ページ)からである。

証拠書類 一三(続き)

回答——護民官グラッキュス・バブーフに宛てて送られ、公表された、

先のブリュヴィオーズ三〇日付けのM・Vなる署名のある書簡に対して^①

真の社会においては、富者も貧乏人も存在してはならない。

貧窮者のために余分なものを放棄しようとする富者は、人民の敵である。革命の目的は、不平等を絶滅し、共同の幸福を確立することである。

「パブーフの教説についての分析」〔証拠書類 八〕第七、八および一〇項。

以下に述べるさまざまな真実は、ブリュヴィオーズ三〇日付け書簡〔前掲「証拠書類 一三」〕への回答として、その筆者〔M・V氏〕に宛てられたものであるが、もっと早く公表されるべきであった。しかし私は、個人的理由から今日にいたるまで待たざるをえなかったことを少しも残念に思っていない。その文書の中で取り上げられている主張が、これまでになく話題となっているからであり、人びとの関心を引いている問題すべてに関して私が今やかなりの注目を浴びていることを私は誇りに思っている。

真の共和主義者はみな、実質的平等の体系を実施する可能性について市民M・Vが提出したさまざまな疑念を喜ばしく思うべきである。人類再生 regeneration の最終段階において開始された闘いが、かつて封建制および君主政の土台との闘いの際と同じように熱烈に自由の友たちから支持されるならば、個人的所有の野蛮な体系の瓦解を通じて、野心と貪欲によってわれわれの恐るべき社会からは排除されてきた黄金時代の幸福が、そして事実としての友愛が、やがて地上によりがえることはまったく疑いがない。

ただ人類愛のみに基づいて革命の道に身を投じた高潔な人びとよ。あらゆる災禍とあらゆる専制支配とをもたらす、今なお存在する原因である個人的富を理性のすさまじい威力によって攻撃すべき時期が到来した。われわれが説いている教説は、啓蒙哲学の冷徹な予測と古代ギリシア・ローマおよび現代の偉人たちの權威とを支えとしている。革命が抑圧形態を変えただけで、安らぎがもたらされることへの空頼みがあったがゆえに不幸と隷属状態がますます悪化し、かつ、抑圧者の数と暴虐ぶりが高まったことによってそれらがいっそう募る事態のうちに大衆を放置するならば、その革

命は犯罪と化してしまうのであって、この教説のみがその革命に適切な終止符を打つのである。

〔市民M・Vが誤解しているように思われる問題〕

市民M・Vが抱いているさまざまな疑念に答えて、実質的平等の体系の可能性、公正さ、そして魅力を一瞥することとするが、その前に、彼が農地の分割について述べ、さらに「分割だけが問題なのではなくて、分割が長続きすることもあるのです」と言い足した際に、彼が誤解しているように思われる問題を明確にしておかねばならない。

全然違う。平等の体制は分割をすべて排除するのである。なぜなら、わが父祖のさまざまな欲求や情念や無知の結果であるわれわれの社会が、あらゆる専制支配と災禍という犠牲を蒙っているのは、まさにこの分割のせいなのだから。わが祖先のひとりひとりがある畑を自分のものであると言いうるようになる前に、明示ないし黙示の契約がその畑の使用を彼に保証したにちがいない。不幸をもちたらずこうした契約がかつて存在しなかったならば、人間は何と幸福であったことであろうか。この契約こそが、自然状態においては非難を受けるのも至極当然であった、力と抜け目なさによる有害な結果を社会状態のうちによみがえらせた。それこそが人びとを孤立させ、激しい欲望をかき立てたのであり、また、さまざまな社会を保持する基礎をこの破壊的な悪徳に置いた。これこそが、無力な人びとや素朴な人びとや高潔な人びとを疲労困憊と苦悩に委ねることによって、力ある人びとや賢い人びとや邪悪な人びとに対して自然の諸条件を免れる手段を提供した。これこそが、あらゆる財の生産者たちにあらゆる窮乏を余儀なくさせ、無為の輩にあらゆる享樂を与えた。これこそが、当然の結果として無知な大衆を野心と狂信の罠に縛りつけた。最後に、これこそが、あらゆる専制支配の根源なのであった。その理由は第一に、何もしないで快楽に浸り切るという望みがなければ、君主や貴族 noble や地方総督になりたいと望むような者は誰もいないであろうという点、第二に、疲労困憊するまで働くことを余儀なくされて時間がないために、またわれわれの社会秩序によって引き留められている不可避的な無知ゆえに、自

分たちの意見を声に出すことのできない人びとを自由であると称することほど、人を欺くものはないという点にある。これが、個人的所有以上に、あるいは個人的所有の第一の根源である農地の分割以上に平等と幸福に反するものとはひとつもないことの理由である。

それだけではない。一部の人びとの言うところによれば、結局は最大限のわれわれの社会的幸福が帰着するとされるこの農地分割を行なったならば、公共の繁栄と今日呼ばれているものの唯一の基礎となっている、所有者たちのエゴイズムを募らせることとなり、また、その農地分割が解決すると言われているさまざまな混乱が近い先に戻ってくることを予想させることとなるがゆえに、農地分割はますます悪をひどくすることとなる。

〔実質的平等の意味〕

さて、実質的平等の意味を検討することとしよう。その基礎には、共同の労働 *travaux communs* および 共同の享受 *jouissances communes* という二つの必須条件がある。

まず、労働は、これがなければ社会が減びてしまう必要条件であって、これを免れることは誰にとっても不正行為となる。労働を免れる者は公共の富を減少させるか、あるいは同胞に対する彼の責務を放棄したこととなるからである。

二つの説得力ある理由がこの体制を裏づけている。すなわち、(一) この共同の労働は、現状では構成員の一部の有用な労働しか当てにしない社会の富を増大させ、(二) 健全な社会構成員すべてに労働が配分されたならば、われわれが辛い仕事をもつばら余儀なくさせてきた人びとから耐えがたい負担を取り除き、やがて万人にとって喜びと楽しみの源泉となる、その辛い仕事のわずかな部分のみを他の人びとに引き渡すこととなる、という理由である。人民の大部分がありのままの自然の状態におけるよりも不幸な生活を送っているというのに、なぜ率直にわれわれが描く状態を可能な限り最善のものであると見做さないのか、私には理解できない。未開人を見るがいい。狩りをし、漁をし、耕作を

すれば、彼の労苦の果実はすべて彼のものとなり、彼の知るすべての幸福を享受している。しかし逆に、わが日雇い労働者や農民たちは、自分たちの生産物を享受し続けるどころか、またわれわれの文明が思い描かせる幸福を満喫するどころか、貪欲で無為の土地所有者たちにすべてを譲渡せざるをえないのであり、現実に飢えや渇きや季節の厳しさに苦しんでいる。

誰もが社会という大家族のために働くこと、そしてそれと引き換えに生活の糧やさまざまな楽しみや幸福を受けると、これこそが自然の声であり、またこれこそが、平等が絵空事でなく、各人の自由がしっかりと保証されている状態なのである。

〔芸術はどうなるのか〕

市民M・Vよ。君は、あらゆる趣味や好みの放棄について、芸術家と靴直しの食事の間に存在するとされる平等について、また、芸術の衰退についても実質的平等の体制がもたらす有害な結果についても語り、そのことによって実質的平等制がばかっていることを証明したと言いつ張っている。こうした反論は、君が古くからの偏見を免れていないことを示している。平等状態に立ち戻ることが未開で野卑になることであると思うのは、その構造を理解していないからである。われわれが、大多数の人びとが蒙っているはかり知れない、絶え間ない窮乏を終わらせようと望んでいるときに、また、各人の労働が彼に快適で楽しい生活をもたらすことを願っているときに、さまざまな放棄のおぞましさを理由に挙げてわれわれに反論するのは、無気力ゆえに、あるいは労働への嫌悪ゆえに平等の敵となっている人びとのことを理解していないか、あるいは、彼らの仲間だからである。

M・V氏よ。あなたのパンや肉やワインや着物が、靴直しが買うのと同じ店で売られ、同じ好みのものであるのは、なるほど途方もない恐怖であろう。しかしまた、なぜ自然は、この嫌な動物にあなたのような胃と五感を与えようなど

と思ったのであろうか。何と情けない人であることか。あなたが余る富に浸って暮らしているときに、あなたの幸福を完全なものとするための他人の苦痛の一覧表があなたには必要なのであろうか。

さまざまな技能 *skills* や美術の衰退と称されるものもまた、不当に手に入れた栄誉や特権や敬意が取り上げられたときにはすべてが失われると思つてゐるあの才気喚発な人びとによる断定的な反駁のひとつである。なるほどこうした衰退がもたらされる運命にあるとしても、美術のもつ優れた点とは無縁の人民大衆は、不愉快な変化を感じることはないであらう。しかしこのような結果は恐れるには及ばない。しかもわれわれの平等の体制においては、技能 *skills* が一般に役立つようになり、また、幸福な人びとの巨大な協同社会が必ずや生じさせる気高い感情に合致した崇高な影響を受けることは明白なのである。市民たちは、不平等も贅沢さもないけれども、十分に食事をとり、きちんとした格好をし、十分に楽しいときを過ごすこととなる。共和国のみが、豊かで、壮麗で、全能となるのである。

確かに、ごく一部の寄生者たちの退屈を紛らせ、彼らの膨大な量の金銭を巻き上げることに役立つ物を生産する幾つかの技能は、社会の大部分の幸福を増大させるその他の技能に取って代わられることになるであらう。しかし、こうした好ましい変化を残念に思ひうるのはどのような人なのであろうか。さまざまな学問と美術が、絶えず後から後から生まれてくる厄介な要求に駆り立てられることから解放されるがゆえに、天才はもう栄光への愛にのみ導かれるようになり、また、やがてマエケナスたちのお世辞やエゴイズムによる拘束を振り払うことによって、彼の唯一の目標は社会体の幸福となるであらう。

軽薄な詩や平凡な建築やつまらない絵画の後に生まれるのは、円形競技場や聖堂や見事な柱廊であり、今日では動物よりもひどい住居に住んでいる主権者がそこに行つて、記念建造物や哲学書のうちから叡智の教説や模範、そして叡智への愛を吸収することとなる。

〔實質的平等の体制の魅力〕

この素晴らしい計画の魅力について私は概略を示すだけにしておくが、その計画のうちに、各個人が最小の労苦にふつてもつとも快適な生活を享受しうる状態を見出す、という問題への解決策が認められるであろう。

こうして、ありとあらゆるもののきわめて多様な生産物は大衆のものとなるのであり、次いで大衆はそれらを各人の最大の幸福のために配分することとなる。市民M・Vよ。それゆえ君には、人びとに放棄を余儀なくすることではなく、その逆に、大衆の窮乏を和らげることが提案されている、ということを理解していただけるであろう。

また君には、このような状態においては、貪欲の根絶が嫉妬や悪知恵や猜疑心を終わらせるがゆえに、人びとは本當に兄弟となり、万人の幸福を作り出す秩序の保持にこと細かく関心をもつようになる、ということも分かっていただけである。

啓蒙哲学のさまざまな観念は少し前には妄想と見做されていたが、それらが現実のものとなったのはフランス革命のおかげであった。われわれは革命を開始した。その革命を終わらせようではないか。われわれが、現在の地点で中断したならば、人類がわれわれに感謝すべきことはたいしたものでなくなるであろう。われわれの悲惨な状態から私が主張する状態に移行するには、以下のことが必要である。すなわち、

- 一、現在のすべての富を共和国の権限の下にまとめること、
- 二、健全な市民全員に、各人の能力と現在の習熟とに応じて労働させること、
- 三、相互に助け合っている労働を関連づけることによって、また、単に現在のさまざまな富の供給過剰の結果である労働に対しては新たな指針を与えることによって、労働を活用すること、
- 四、農地と製造業のもたらすあらゆる生産物を継続的に集めること、
- 五、さまざまな生産物と楽しみとを平等に配分すること、

六、あらゆる所有とあらゆる個人的商業との源泉を枯渇させ、それらを公權力に任される、思慮深い配分に置き換えること、

七、各人が自分の能力と習性にもっとも適合した労働に慣れる場となる、共同の教育舎 *maison d'éducation* [第八章を参照] を設けること、が必要である。

こうして、もはやエゴイズムは諸個人の活動および労働の動機ではなくなるのであり、諸個人は自分たちの生産物の種類や用途がいかなるものであれ、食料、衣服その他の面で同じ報酬を受け取ることとなるであろう。

わが金持ちたちは、こうした結果から以下のような二つの反論を導き出す。すなわち、

一、食物を摂り、自分の状態を向上させたいという欲求が、労働および再生産の源泉である。この欲求や希望が消滅すれば、労働は停止し、再生産は枯渇し、社会は滅びる。

二、あらゆる種類の労働が同じ報酬を受け取ることとなると、社会にとって有用なさまざまな発見をもたらす学問研究に没頭する動機はもはや存在しなくなってしまう、という反論である。

私は以下のように反駁しておく。すなわち、

一、日々きわめて短時間の仕事をすることによって、各人にとっていっそう快適で、かつわれわれを絶え間なく蝕んでいる不安から解放される生活が保証される、ということをするすべての人に理解してもらうことは簡単である。しかも、今ごくわずかな金を手に入れるために疲労困憊するまで働いている人びとは、短い労働で多くを手に入れることに必ず同意してくれるであろう。

先の反論はさらに、労働をつらいものと見る見方に全面的に依拠しているのであり、労働が思慮深く、かつ全員に配分された場合には、労働はわれわれが提示している体制においては、誰ひとり免れたいと思ったり、また免れるのが得になったりすることのない、心地よくて楽しい活動となるであろう。

二、學問の進歩が、財産への貪欲さよりも榮譽への愛に由来している、ということとは十分に立証されていると私は思う。しかもこの場合、真に超俗的なわれわれの社会は、決然として、また純粹に、社会の恩人たちの榮譽を称えるすべての手段を結び付けているのであって、今日の腐敗したさまざまな社会では天才と美德とが輕視され、赤貧を余儀なくされており、たいい愚かな言行と犯罪とが財産を溢れるほど手にしているのを目にするが、当然にもそういう社会よりも多くのことを學問に期待しうるようになるであらう。

私の書いたものを読む人びとが、今日の諸制度すべての基礎をなしている貪欲とエゴイズムの原理が憎むべきものであること、そして騒乱やさまざまな不幸やわれわれを分裂させ、われわれを抑圧している専制支配を終わらせるには、各人が平等な関与によって平等の利益を引き出しうる、真の社会状態にわれわれを戻す必要があるということ、これらのことにはっきりと氣付いてくれるように、私は十分に述べてきた。經濟理論家たちのいかなる理屈も、常識ある誠実な人びとに対し、何もしない人びとがすべてを手にし、あらゆることをしているのに、ほとんど何も手にしない人びとを服従させ、卑しめ、虐待していることが完全に正しい、などと説得することはけつてできないからである。

〔平等社会における政府の必要性に関して〕

市民 M・V はさらに、政府の必要性和共和国の非常な広大さを理由に、われわれが説く平等の体制に反論している。こうした反論への反駁は簡単である。すなわち、

一、きわめて単純な機構からなるわれわれの平等の体制を保持する任に当たる人びとは、共同の幸福にとって必要な労働者と見なされるべきであり、また、彼らを監視することに非常に強い関心を抱いている他の市民たちより多くの楽しみを手に入れることはけつてできないがゆえに、彼らが人民の意思を無視して自分たちの権力機関を保持しようと試みることなど、心配する必要はないであらう。

二、小部族においていろいろな偏見から共同の労働と享受を妨害するさまざまな障害が簡単に克服されるのであれば、フランスのような大規模な社会においても同じようにそうした障害が克服されることを妨げるものは、何ひとつない。まず、労働に関して言えば、すべての市民が、各人の配置された場所で、また土壌の適性に応じて、労働に専念しうるようになることは、容易に理解できる。「次に」共和国のすべてのコミュニティに対する、あるいはさまざまな風土に応じて共和国に加わりうるようなすべてのコミュニティに対する消費財の平等な配分に関しては、統治者および被統治者たちの貪欲なエゴイズムが今日この種の活動に対してもたらしている障害から解放された思慮深い権力機関がなぜ、現状においては投機家たちの思惑による不足に往々にして曝されている市民たちにとってより満足のいく形で配分しえない、ということになるのか、その理由が私には分らない。

私は、このような「新しい」状況においては、以下のようになると見ている。すなわち、

一、工芸artisanは、思慮分別のある諸制度のおかげで、より有用な場所に位置するようになる。また、農業従事者に接近することによって、あらゆる悪癖の巢窟である大都市を消滅させるようになり、「他方」多数の幸福な住民で光彩をまし、その普及を止めるものは何ひとつなくなる農村部フランスには人が住みつくようになる。

二、共同の教育によって啓蒙され、労働に慣れた人びとは、今日自分たちの家族を愛する以上に祖国を愛するようになる。また、政治に関する事柄について大義を認識しながら議論することによって、膨大な人口が獅子のような勇氣をもって防衛する民主政と美德との最初の模範を世界に対して示すようになる。

三、通貨をもたず、窮乏を経験することもなく、心配事もなく、また将来に備えて蓄えようという欲求も抱かず、労働という共同の租税を祖国に納めるフランス人は、自然の楽しみを味わい、残りの時間を公共の祭典や法律についての議論や青年の教育に費やすようになる。

四、社会は、裁判や憎悪や嫉妬から、そして所有がもたらすあらゆる有害な影響から解放されるようになる。

五、きわめて単純な諸原理に還元される立法は、もはや社会の知識と楽しみとを増進させる技術にすぎなくなる。
 六、危機に瀕した祖国は、一日に半時間労働を増加することによって、ヨーロッパの金融家たち全員が今日供給するよりも多くの兵士と資金を見出すようになる、と見ている。

ああ、わが同胞たちよ。以上が、自由、平和、そして幸福なのである。以上が、万人の隷属状態で終わるか、それとも万人の幸福で終わるほかない、胸が張り裂けるような多くの苦しみや多くの徒党に対するただひとつの解決策なのである。では、われわれが自由に理性に立ち戻ることによって、お互いに嫉妬し合い、戦い合い、破壊し合うのをやめることに對して、何が強力な障害として妨げになるのであろうか。一方の人びとの愚かさ、他方の人びとの怠惰、そして、自分たちの有害な富裕がもたらした同胞たちの貧困を平然と眺める人びとの心を高慢にした悪癖、である。

祖国の友たちよ。超俗的な愛国者たちよ。革命を終わらせるのは諸君の役目である。専制支配と不幸の源であるエゴイズムを根絶するのは、諸君の論理、諸君の文書の役目である。最後に、著しい不平等の結果にして原因である王政主義を消滅させるのは、事実上の平等と民主政があらゆる利害をまとめ、あらゆる不公平を消滅させるときまで、幾人かの人びとからそれ以外のすべての人びとを苦しめ、虐待し、傷つけ、抑圧する権利を奪うときまではいかなる形態の政府の下であれ存続する王政主義を消滅させるのは、真理の役目である。

権力が人間の社会性 *socialité* の向上を妨げることに関心を抱かなければ、この企ての成功は確実であると私は見做すであろう。人民に對して明確かつ率直に語りかけたならば、人民が平等を目差して即座に決断することを私は疑っていないからである。しかし権力者たちの腐敗した心と不安な想像力にとっては、そのことは氣に入らない。そうである以上、大衆に對する自分たちの義務を勇敢にも果たそうとする人びとは、ありとあらゆる方法で苦しめられることだけでなく、すでに生じていることであるが、強盗や放火犯や王政主義者と呼ばれることをも覚悟しなければならない。確かに、王権を打倒し、またいかなる不平等も、怠惰と富との不平等さえ許容しえないでいる人びとが、不平等の極致

たる王政を好んでいるとはなかなか信じえないであろう。しかし、要するにそう思い込む愚か者たちが存在するであろうし、したがって愛国者たちはこの新たな罵詈雑言に耐えねばならない。万人の幸福を擁護しつつ彼らが命を落とさないならば、後世の人びとからすれば、その革命は啓蒙哲学への汚点、愛国者自身にとっての犯罪となるであろう。

〔平等社会への過渡期について〕

私はまだ、現在の体制から平等の体制への移行期における秩序破壊を心配する、市民M・Vの最後の疑念を拭い去らなければならない。

愛国者たちよ。私とともに大声で叫ぼう。われわれの金を海に投げ捨てよう、全員で働こう、全員で楽しもう、怠惰と贅沢を追放しよう、と。しかも思慮分別ある論理に基づくこの心地よい言葉は、心配されているように思われる不安と煩悶のすべてをこの改革から振り払ってくれるであろう。しかし、わが国の偉大な国民的運動に伴って生じたことが一度もなかったのに、この移行期には逸脱が付随するにちがいない、というのが事実であるとしても、私は、そうした逸脱は消滅しつつある秩序破壊がもたらす最後の効果となる、と述べておく。実を言えば、混乱と秩序破壊は今日のヨーロッパにおける社会すべてに現に存在しているのであり、そこでは、さまざまな口実で、またさまざまな形の下に、人民が彼らの諸権利を剥奪されているのである。しかももちろん、組織的で永続的な大規模な秩序破壊を終わらせるためには、そして、革命に関する啓蒙哲学者たちの予言を現実のものとすることによって、諸政府の臣民たちがこれまでわれわれの変化のうちに、われわれがこれほど勧めてきた全員の幸福という明確かつ決定的な兆候があることに気づいていないがゆえに、今なおわれわれをつけ回している諸政府をついにきつと動揺させることとなる幸福の体制を再建するためには、いくらかの一時的な逸脱という危険を冒すだけの価値はあるであろう。

パリ、共和暦第四年ジェルミナル二八日〔九六年四月一七日〕

原注

- (1) 自然権は、自然状態と呼ばれているものとは本質的に異なる。前者は経験と省察の結果であり、後者は第一印象と無知との産物である。

訳注

- (1) この文書は無署名であるが、サイッター編の『目録』によれば、ブオナローティが執筆したとされる。Cf. Sautta et al., *Inventaire des manuscrits et imprimés de Babeuf, op. cit.*, p. 399. 日付はジェルミナール二八日(九六年四月一七日)、配布は翌日。なお、やや長い資料であることから、訳者による中見出しを()内に付しておいた。
- (2) マエケナス、カイウス・クリニウス(メセナとも) Caius Cilius Maecenas (ou Mécène) (前六九頃〜前八年)。古代ローマで皇帝アウグストゥスに重用された政治家。文芸愛好家。転じて、富や財力による文芸庇護者を言う。
- (3) 祖国は危機に瀕す *La patrie en danger*。一七九二年七月一二日の布告(河野編、前掲『資料 フランス革命』所収の石井三記訳「一八 布告 祖国は危機にあり」を参照。

証拠書類 一三(補)

フォブル用の新しい唄——「それが私の悩みごとさ」という曲にのせて

飢えと寒さに死にかけている、
すべての権利を奪われた人民よ。

君たちは小声で嘆いている *se désoler*。(繰り返し)
それなのに厚かましい金持ちどもは、

かつては君たちの善意から大目に見てもらったのに、
横柄にも立ち直っている se console^o。(繰り返し)

カネに満ちあふれた成り上がり者たちは

苦勞も心配事もなく、働きもしないのに、

甘い蜜を独り占めしている。(繰り返し)

しかし働く人民よ。君たちが

食べ、消化するのは、そうすることができるとしても、

ダチョウ¹のように、鉄なのだ。(繰り返し)

グラックス兄弟、ブブリコーラ²、ブルトウス³といった人びとの

靈を思い起こしてくれたまえ。

彼らが君たちを守る城壁の役目を務めてくれんことを。(繰り返し)

勇敢な護民官よ。急いでいただきたい、

われわれはあなたを待っている。

聖なる平等⁴の法を示していただきたい。(繰り返し)

その通り。護民官よ。けりをつけないといけない。

リュクサンブル宮とヴェローナ⁵を

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀(五)

あなたの筆が青ざめませんことを。(繰り返し)
平等の支配は、

簡素なのであって、

羽根飾りも、王座も望みはしない。(繰り返し)

確かに、一〇〇万人の大金持ちのせいで

人民がかなり前からさせられているのは、

ドングリの実を拾うことばかり。(繰り返し)

しかしわれわれは、フォブール〔市外街区〕では

リユクサンブル宮の梟も、

ヴァンデの梟黨員も望んではない。(繰り返し)

ああ、デクレを発することしか頭がない連中よ。

思い残すことなく、

諸君の予算書を火の中に投げ入れたまえ。(繰り返し)

ああ、知性の乏しい連中よ。われわれに任せたまえ。

諸君がいなくとも、平等は

豊かさを回復してくれる。(繰り返し)

総裁政府は、

小役人の権利（五）の名において

われわれに書くことを禁止している。（繰り返し）

書かないでここう。しかし誰もが、

内心では、共同の幸福を目差して

仲のよい兄弟として陰謀に加わっている。（繰り返し）

人材のいない両院「五〇〇人院と元老院」と五人の総裁は、

いつもおどおどしている。

槍（六）という名前を聞いただけで。（繰り返し）

大事にされ、ちやほやされている兵士よ。

そして鎮圧されてきた民主主義者よ。

それが共和国なのだ。（繰り返し）

何と残念な。追い詰められた人民よ。

果敢な仲間たちよ、諸国王に勝利した人びとよ、

栄光に包まれた兵士たちよ。（繰り返し）

ああ、諸君はもはや感謝されてはいない。

えっ、何だって。諸君は

平等をめざす、いわゆるパプーアの陰謀（五）

親衛隊員になるというのか。(繰り返し)

人民と兵士が一緒になって、

王権とバステューユを

見事に粉砕しえたのだ。(繰り返し)

新たな専制支配者たちよ、政治家たちよ。

人民と兵士が仲良く団結するのを

恐れるがいい。(繰り返し)

私は覚悟している、

監獄が私の唄に対して与えられる罰となることを。

それが私の悩みことさ *se désoler*。(繰り返し)

人民はその唄を暗記してくれるだろう。

たぶん人民はその作者を称えてくれるだろう。

それが私の慰めさ *se consoler*。(繰り返し)

原注

- (1) シルヴァン・マレシャル(第一章原注(14)の補注(2)を参照)による作詞「もともとピラの形で共和暦四年ジェルミナル二日(九六年三月二日)頃に配布された。 Cf. A. Audard (ed.), *Paris ……*, op. cit., t. 3, 1899, Cerf, pp. 71-73.

訳
注

ジェルミナル二一日（四月一〇日）発行の『人民の啓蒙者』紙第五号に再録された。

- (2) 王政とリュクサンブール宮に指導者たちが居住していた新たな貴族支配（ヴェローナはイタリア東北部ヴェーネト地方の都市。九五年六月八日にルイ十七世がテンブル塔内で没した後、当時この都市に住んでいた叔父（ルイ十六世の弟）のプロヴァンス伯がルイ十八世を名乗った。九五年六月二十四日に、国王殺しの処罰、旧体制の復活、三身分の復活、国有土地の返還など、王政復古の際の諸原則を含む「ヴェローナ宣言」を発した）。

- (3) 羽根飾りは、総裁政府のメンバーたちの装飾品であった。

- (1) ダチョウ。駝鳥は石でも何でも食べて、消化できる強靱な胃をもっているとされる。

- (2) ウアレリウス・プブリコラ、プブリウス Publius Valerius Publicola（？～前五〇三年）。古代ローマの政治家で、共和国創設時の執政官のひとり。パラティノ丘にあった自分の大邸宅を手放し、また、古代ローマ王国最後の王タルクィニウスの財産を配分した、とされる。プブリコラという名は「人民の友」に由来する。

- (3) プルトゥス、ルキウス・ユニウス。「証拠書類 一二」の訳注〔3〕を参照。

- (4) 一〇〇万人。「証拠書類 一二」の訳注〔1〕を参照。

- (5) ドングリ（団栗）の実は猪が食し、豚の餌となる。

- (6) droit plunitif。裁判所の書記、転じて小役人を意味する plunitif は、鷺鳥の羽ペン plume から。根源的権利 droit primitif のもじりと思われる。

- (7) 槍 pique。共和暦第三年プレリアール一日（九五年五月二〇日）のプレリアール蜂起（第二章訳注〔2〕を参照）の際に、蜂起したパリのサン＝キュロットが公会議員フェローを射殺し、その首を槍の先に刺して公会議長ボワシー・ダン格拉斯に突きつけた事件を想起させている。

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

平等派の唄

破廉恥な法典があまりにも長い間

人間を人間に服従させてきた。

悪党どもの支配は滅びるがいい。

われわれがどこまで進んでいるか、ついに知らねばならない。

われわれの声を聞いて目覚めよ。

そして深い暗闇から脱け出したまえ。

人民よ。諸君の権利を回復したまえ。

太陽はすべての人に輝いている。（以上四行繰り返し）

慈悲深い母である自然よ。

あなたはわれわれが平等であるように創造してくださった。

なぜ、財産と労働には

災いをもたらす不平等があるのだろう。（以上四行繰り返し）

なぜ四、五人の暴君（総裁）どもの周囲に

べこべこと隷属する人が一〇〇〇人もいるのだろう。

なぜ弱者と強者がいるのだろう。

立ち上がれ、サン・キュロットよ。目覚めよ。（同）

人類の黎明期には、

金も、戦争も、

身分も、君主も、

贅沢も、貧困も、まったく見受けられなかった。

神聖で心地よい平等が

大地に満ち、大地を肥沃にしていた。

こうした至福の日々には

太陽はすべての人に輝いていた。

すべての人びとが、共同の安楽さを味わいながら、

愛し合い、幸福に暮らしていた。

そこでは、後悔や恥ずべき論議が、

自立を妨げることはまったくなかった。（同）

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

何と残念なことか。やがて野心が、

ペテンを抛りどころにしつつ、

権利侵害をやったのけ、

計画を練り、侮辱を企てた。(同)

君主と臣下が、

大金持ちと極貧の人びとが、

主人と従僕が見られるようになった。

前にはすべての人が似たようなものだったのに。(同)

さまざまな法と制度の名において

恐ろしい略奪が〔かつて〕夢見られた。

〔今では〕犯罪が美德と呼ばれ、

略奪が必要事と呼ばれている。(同)

何と残念なことか。コルネリアの^①

不滅の息子たるあなた方の高潔な意図も、

暗殺者たちの剣から

あなた方の命を救うことができない。(同)

フランス人のリユクルゴスたる

マラー、サンリジュスト、ロベスピエールよ、

すでにあなた方の思慮深い計画の有益な効果を
われわれは感じ取っていた。

すでに金持ちとその祭壇は

深い暗闇の中に再び陥って、

死者たちにこう繰り返させていた。

「太陽はすべての人に輝いている」と。

すでにあなた方の崇高な仕事が

われわれを自然に立ち返らせてくれていた。

その報いは何だっただろうか。処刑台、

暗殺、拷問だったのだ。(同)

ピットの資金とダン格拉斯の^②声は

新たな破滅への道を開いた。

這いつくばるのか、凶悪犯になるのか、

死かそれとも犯罪かを選びたまえ。(同)

人民よ。無氣力きわまる眠りから覚めて

古くからの呪縛を打ち碎きたまえ。

きわめてすさまじい目覚めによって

好結果をもたらす犯罪を始める合図を報じたまえ。

われわれの意見に耳を傾け、

そして、「街頭に」出たまえ。……

原注

〔1〕これらの唄は同じ時期に秘密総裁府の手で配布された「オリジナル版、エディシオン・ソシアル版ともにこの唄に題名は付けられていないが、Victor Advielle, *Histoire de Gracchus Babeuf et du babouvisme, d'après de nombreux documents inédits*, Paris, chez l'auteur, 1884, t. 1, p. 305 に従って、「平等派の唄」という題名を付しておいた。作詞者は不詳。

訳注

〔1〕コルネリア Cornélie (前「八九頃」一〇頃)。グラックス兄弟の母。

〔2〕ビットについては「証拠書類 二」の訳注〔2〕を、ダン格拉斯については、第二章の訳注〔26〕の補注〔*2〕を参照。

証拠書類 一四

愛国者たちへの緊急の伝言^{〔1〕}

諸君。今日私は、諸君に語りかける予定はまったくなかった。しかし私は、根気の要る仕事を中断して、きわめて急

を要する話をいくつか諸君に伝えたいと思う。それらに耳を傾けてくれたまえ。それらは諸君にとっても関係あることなのだから。

〔この間の情勢〕

真理が勝利している。抑圧者たちはみな青ざめている。人民は、その友たちのおかげで誤りを悟っている。軍隊もまたはっきりと分かっている。あふれるようなエネルギーは、何をもってしても押しとどめることはできない。わが国の支配者たちにはこうしたことすべてが分かったのであり、それゆえ、われわれにとっては慰めとなり、彼らにとっては絶望となることが予想される崩壊を避けるために、先ごろ砲兵中隊を交代させたばかりである。

一〇日ないし一二日前から、彼らは最良の市民たちに対する迫害や侮辱が、もはや彼らが手にする有効な武器ではない、ということに気付いた。彼らはそれらを策略と胸のむかつくようなへつらいに置き換えた。獐猛な狼が従順で用心深い狐に変身したのである。しかし騙されてはならない。彼らはやはり肉食動物なのだから。彼らの本質は何ら変わっておらず、またけっして変わることはないであろう。彼らは今日のところは猫を被っているが、明日になれば諸君をむさぼり食うであろう。

〔警戒すべき事柄〕

以下に、諸君に警戒していただくべき事柄を記しておく。

タリヤン〔第一章原注(20)への補注(*1)を参照〕、ルジャンドル〔第三章訳注(32)を参照〕、バラス〔第二章訳注(36)の補注(*1)参照〕といった輩の放った密使たちやこれらの紳士自身がいろいろ奔走し、諸君をきわめて忌まわしい罠に陥れようと懸命になっている。彼ら自身、諸君の災厄をもたらした首謀者であったのに、それをもたら

した張本人たちすべてに敵対する諸君の気持ちに付け入っている。破廉恥にも彼らは、自分たちはそうではないふりをしている。あるいは少なくとも、迫害者の一団は彼らの命令に従って、また彼らに唆されて行動したにすぎないのに、彼らはその迫害者の一団とは今日では一線を画しているふりをしている。彼らはまた厚かましくも、自分たちが大罪を犯し、また犯させたのに、今ではその大罪への懲罰者になろうとしている、と発言している。彼らの意図が何を目差しているのか、彼らがいかに深い溝を諸君の足元に新たに掘っているのか、諸君に示さなければならない。しかしその前に、彼らの策謀の経過を諸君に示しておく必要がある。

〔策謀の経過〕

フェリュと前述の仲間にあつては、新たな悪党どもが付け加わっており、作ろうと思えばここで完全な名簿を作ることもできる。しかし今日は、そのうちの二人について知らせるだけにしておく。リシャールおよびスレー（後者は文人を自称）は、数日前からチュイルリ宮（両院の所在地）（近く）でいくつかのグループを編めることができるようになっている。彼らは、民衆の興奮を極端にかき立てるといふ、彼らの任務を見事に果たしている。彼らはそこで、彼らの話を聞こうとする人すべてに対して、両院は例外なく極悪人で構成されており、バラスとカルノーは人民の災禍を終わらせ、祖国を救うはずの素晴らしい共和主義者であり、それゆえにこそ、二人を暗殺しようとする恥ずべき企みが存在しており、したがって彼ら二人と彼らの仲間^①に味方しなければならず、直ちに武装し、警鐘（蜂起の合図）を打ち鳴らさねばならない、と語っているのである。

これらの事実に、次のような事態を付け加えておかなければならない。

密使リシャールがこうした共同謀議に基づく考えを吹き込もうとして数日前にチュイルリ宮のテラス（宮殿両側の段丘状の築山）で話し込んだ相手である真の民主主義者は、それほど重要な事柄（蜂起）がなぜそれほど急いで行なわれ

ようとしているのか奇妙である、との非難をリシャルから受けていた。そのとき、彼らはルジャンドルに偶然出会ったのであるが、そのルジャンドルに対してリシャルは時事問題に関する情報を尋ねたのである。「これに対し」プレリアルの際の人殺し（ルジャンドル）は、護民官はバラスやカルノーといったきわめて立派な共和主義者を特に執拗に攻撃しているが、どうして愛国者たちがその護民官の後押しに付き従いうのか解らないと、また、イスナール「証書書類 二」の訳注（22）を参照」と彼の一味といった、悪事をたくさん働いたことを護民官も熟知している人びとのみを糾弾すべきであって、愛国者たちはこれらの人びとを一掃するために提携すべきであると、しかしどちらの側も相互に犯すこともありえた些細な過ちを忘れるべきである、などと答えたのであった。

そのすぐ近くでは、別の密告者がひとりの民主主義者に、パリのあるカルティエに影響力を及ぼしているとある人物を見たことがあるかどうか、なおも尋ねていたのであり、タリヤンから何かいいものが届けられると言っていた。そしてその策謀家は、「君は愛国者だし、邪魔者ではない。数日以内に爆弾が爆発するにちがいないし、警鐘が打ち鳴らされるにちがいない。私は、そのことを知らせるために、とある男を捜している」と付け加えた。

企みはかなり巧みにできており、そのために用意された餌は、諸君が騙され、犠牲になった他の多くの餌と比べて、さほど不味いものではなかった。しかし、諸君がまたその餌に騙され、犠牲となることなどありうるのであろうか。

「バラスやタリヤンらの策謀」

諸君を暗殺し、侮辱し、無数の鉄鎖の下で苦しめることを一度としてやめたことのない人びとの望みは、明らかに次のことである。

何よりも彼ら自身の首を救うこと。彼らの類稀で無数の犯罪を認めている人民の大陪審が、以前に下した恐ろしい判決を執行しようとしていることが彼らには分かっているからである。彼らは、民主派に救いを求めるふりをするに

よつてのみ、自分たちの首を救うことができる、と判断しているのであり、その民主派については、権力機関を共有している人びとのうちの幾人かの助けがなければ人民は救われえないと民主派を説得しようと思ひ込んでいるだけに、ますます容易に民主派を丸め込めると期待しているのである。

しかしわれわれは、彼らが自分たちの首を救うというこの目的をどのようにして達成しようと思つてゐると予測すればよいのであろうか。きわめて悪辣な手続きによって民主政を破壊した際の卑劣さを償ひ、また、この償ひによって民主派から寛大な赦しを手に入れるために、彼らは民主政に明確に奉仕することを通じてその目的を達成するであらうと思ふほど、愛国派はお人好しなのであろうか。單純な民主的諸法律の下で、また寛容な国民の嚴かな赦免に保護されつつ、平穩な暮らしを送るために、彼らが権力や支配的地位や主導性を革命の過程で、また革命の後で手放すであらうと想像するほど、愛国派はお人好しなのであろうか。そうではない。違ふ。彼らの計画はそのようなものではない。この抑圧者たちには、民主政の諸原理が優位に立っていること、彼らの権力の座が動揺していること、彼らは信頼感をすべて失っていること、人民の擁護者たちが【彼らに代わつて】全面的に信頼を得ていること、以上のことが分かつてゐるのである。(われわれ「プロナローティのこと」が、こゝで目についている新聞(一七九六年四月一三日付け『護民官』紙第四二号)には、長い欠落があり、完全なものを見つけたことができなかった(以下、【】内は訳者による復元箇所である)。¹【彼らは「人民が信頼を寄せている人びとすべて、彼らの仲間、そして人民の大義のために積極的な役割を依然として果たしうる人びとすべてを一網打尽にすることできる、何か新たな展開を考え出さねばならない」と述べた。彼らが行なおうと望んでいるのは大量虐殺体制の最後の所産なのであり、彼らがしようと望んでいるのは愛国派の生き残りを一掃することである。彼らは次のように述べた。「これらの愛国派に対してお世辞を使い、彼らを懐柔し、彼らが要求することすべてを約束しよう。何が起ころうであらうか。われわれの立場からすれば、当然のことながらわれわれのみが、彼ら愛国派から、またそれ以外の敵すべてからもわれわれを永遠に解放してくれる運動の主導権を握る。わ

れわれは、彼らの側からの敵対行動をすべて封じ込める。われわれは、彼らが人民の精神に対する働きかけを通じてもたらしかねない、彼らの大義にとって有利な結果すべてを無力化する。われわれは彼らの指導者となり、われわれの權威を永遠に確立する」と。以下がその方法である。「われわれバラス、フレロン（第一章原注（21）の補注（1）を参照）、ルジャンドルそしてタリヤンが先頭に立つ。われわれの名前は泥を塗られているのであって、人民大衆すべてをわれわれの旗の下に結集させることにはならないであらう。大多数は、恐怖にしり込みし、われわれの旗の下で行進することを拒むであらう。（しかし）これがわれわれにとって好都合なのである。われわれが集めるのは、われわれに金銭で雇われた刺客たちだけ、そして彼らとともに、わがスパイたちがままと誤りに陥らせた、熱烈ではあるが思慮に欠ける愛国者たちからなる中核、つまり理性や正義に照らして行動するよりも、事態の救済を目差すと思われるすべてのことに身を投じようという、こみ上げる欲望に駆られて行動する人びとからなる中核だけであらう。この手段による場合には、われわれは部分的な動員を行なうことにしかなるまい。しかしこのことがわれわれにとって必要なのである。部分的な動員は、権力の座を奪われるという心配をわれわれに抱かせることにならないし、その他すべての作戦の保証となる最初の作戦を可能にしてくれる。われわれには、われわれとは別の仕方で王党派である人びとを亡き者にするには、この部分的な中核だけで十分なのである。ロヴェール（第一章原注（21）の補注（1）を参照）、イスナール、ランジュイネ（第一章訳注（25）を参照）等々といった輩は古くからの家系（ブルボン家）の国王を望んでいるが、われわれは新しく仕立てる国王を望んでいる。われわれ自身が国王となるのだから。さて、われわれは、愚かな民衆煽動家たちとともにルイ十八世の擁護者たちを殺害しようとしている。これらの指導者が死んでしまえば、われわれの王政主義に敵対する王政主義はもはや存在しなくなる。われわれの王権が確立されるのである。民衆煽動家たちは、ヴァンデミエールの際と同じように、この向こう見ずの行動の後で別のことを要求するであらう。しかしヴァンデミエールの際と同じように、われわれは彼らに対して簡単に沈黙と現状維持とを厳命しうるのであらう。われわれは彼らに、「もう

十分だろう。現時点ではこれ以上のことは何もなされない。また起こされるまで休みたまえ」と言う。「しかし」われわれは、彼らに長い間眠らせておくわけではない。もはやわれわれには闘うべき徒党はひとつしかないがゆえに、実に安全にこの秩序破壊分子の集団を聖バルテルミーの虐殺のような目に遭わせることができるのであり、この集団は王党派よりも数日長生きするだけとなる。われわれは一度しか大殺戮を行なわないのであって、その後はまったく言いなりになる人びとの群れを支配するのである」と。

諸君。以上が彼らの策謀なのである。以上が残酷、虐害に満ちた彼らの秘訣なのである。それが暴かれた後になってもなお、嘆かわしいことにそれに騙される者などありうるのであろうか。

そのようなことはあってはならない。われわれは部分的な運動を起こすのではない。おそらく愛国者と人民の大多数は、バラスやタリヤンのような人物の陰險な訴えに心動かされることはないであろう。しかし、私の警告の後には、彼らが騙しうるのはもはやわずかしなくなるであろう。そう、その通り。彼らの反キリスト^⑧、偽りの予言者たちの努力は水泡に帰すであろう。哀れな腰巾着たちよ。あらゆるところで共和主義者たちを襲撃するがいい。街頭で散歩している共和主義者を捕らえるがいい。いたるところで諸君の恥すべき姿を見せて彼らの目を曇らせるがいい。しかし、諸君の悪意に満ちた毒もわれわれの強力な解毒剤を前に効きはしない。彼ら共和主義者は、諸君にふさわしいこの上ない軽蔑の念をもって、諸君を、そして諸君の陰險な意図をも撃退するであろう。私は諸君の指導者たちに対して、諸君に支払う金は今や無駄ガネである、と明言しておく。

〔人民が従うべき道〕

人民は一斉に、そして幾つかの確かな特徴から合図が識別される彼らの真の解放者たちの声を聞いてのみ、決起する。人民は、彼ら解放者が人民に対して合図を出すまでは、平静を保つ。拙速によってすべてを失いたくないからである。

人民は、あれほど苦難に耐ええたのだから、自らの解放をいっそう確実なものとするためになおしばらく待つことができるであろう。人民は自らの友たちが「祖国を救う時機はいまだ少しも到来していない」と伝える限りは、彼らの言うことを本当だと信じている。

そしてわれわれも、王政主義の音頭取りたちの及ぼす取り返しをつかない影響力から解き放たれることを望んでいる。しかし同時にわれわれは、ドージェ^⑤の影響力をも厄介払いしたいと願っている。われわれは二つの専制支配のどちらか一方を選択しようとしているのではない。われわれはルイ十六世の札付きの代理人たちを大変に憎んでいるが、バラの花の陰に抑圧を隠してわれわれに差し出す、偽善的な抑圧者たちのことも少しばかりそれ以上に嫌っている。さあ、フレロンやルジャンドルやバラスやタリヤンの旗のもとに馳せ参じてみるがいい。さあ、これらの人全員の些細な過ちを許してやるがいい。彼らはじっさいに微罪しか犯していない。タリヤンは、われわれの災禍の一大画期を引き起こすこと、一貫して自分の行為を弁護すること、また、人民からその諸権利すべてをひとつまたひとつと奪い、あらゆる種類の苦しみで人民を悩ませる反動的活動すべてを熱心に指導することしかしていない。バラスは、テルミドル、ジェルミナール、プレリアル、ヴァンデミエールの独裁執政官 *dictateur* であり続けたのであり、しかもこの最後の時期「ヴァンデミエール」には、愛国者が公会を救うことになった後には、愛国者たちの諸権利を奪回させるようにすると約束しておきながら、彼らを騙したのであって、それだけにいっそう犯罪的な形で独裁執政官だったのである。ルジャンドルは、幾つかの状況においてサーベルを手に人民に立ち向かってばかりいた。そして立派な反動（テルミドル反動）からは、あらゆるやり方で人民を殴り殺し、切り殺すべきときにはいつも、真正正銘の人殺しとして夢中になっているだけであつた。フレロンとは言へば、彼については語るまでもない。彼は、虐殺者すべての手に短刀を渡し、一連の正式の命令によって、公式の日日書類というきわめて単純な方法で、一年半前からフランスの大地に多くの血を流し続けている何千人ものきわめて高潔な愛国者に対する殺戮を組織し、指導しただけである。「しかし」その後になつて、

諸君はこれらの極めつけの紳士たちにひれ伏し、諸君の解放者になってくれるよう彼らに懇願し、彼らを最大限信頼しなければならなくなる。さあ、これらの恐ろしい人びとが自らの敵の打倒に向けて諸君を導くために非常呼集をかけるときには、急いで決起したまえ。しかしその後彼らは、諸君への褒美として、諸君にブレイアールの二の舞を味あわせよう。革命の中では多くの嘆かわしい、常軌を逸した言行が生じた。しかしその革命はそれ以外の革命に付け加えるものではない。(そうでなければ)その革命は実際に起こらないであろう。護民官〔である私〕にはそうしたことは認められない。否。人民はけっして、絶え間なく人民を殺してきた人びとの命令の下で闘うために立ち上るてはならない。私は人民に対してそれを禁じる……。

〔提携と和解について〕

提携〔山岳派との提携 reunion。次章を参照〕、和解、そして誤りや過ちを忘れることが語られてきている。誤りや過ちは構わない。しかし、絶え間ない犯罪は忘れてはならない。われわれは、騙された人びとや、単なる手先や、純粹な意図からしか罪を犯しておらず、祖国に役立つと信じながら祖国に打撃を与えてしまった人びとはすべて、われわれの隊列の中に受け入れるであろう。しかし、今もお続いております、またわれわれにきわめて痛ましい苦難を与えるひどい影響を及ぼしている、一連の犯罪をきわめて計画的に行なった張本人たちが「われわれにもたらしたすべての災禍を癒さねばならない」のに、それらの人びとが今日われわれを指導する位置に就くようになることに同意するという、愚かしいほど卑屈なことはしてはならない。われわれは、彼らがわれわれに自分たちの悪業がもたらした残酷な結果を自ら終わらせることによって、その悪業のすべてを償うと言って来ても(そういうことは口にも出さないが)、われわれは愚かにも彼らの言うことを信じてはなるまい。われわれは、これらの憎むべき輩が銃を手にし、一兵士としてわれわれの隊列の中に加わることを容認してはならない。もしもフランス人民がこれとは違った風に彼らに働きかけたなら

ば、フランス人民は最も卑劣な人民となってしまうであろう。その結果、フランス人はもはや、実力と思慮分別とを備えた人物がただひとりとして、自由の勝利のためにさまざまな手段を用いるに値しない人民となってしまうであろう。市民諸君。以上の真実によく耳を傾けたまえ。元老院にいる王政主義者のことはさほど心配するには及ばない。彼らはわれわれの役に立つのだから。われわれは、彼らがわれわれにまさに仕掛けるつもり of 悪事に対抗することができる。しかも、敵对党派と彼らが闘えば、それはわれわれにとって役に立つ。統治者すべての中にもはやただひとつの党派しか存在しないときには、彼らは、人民の党派に対抗するはるかに大きな勢力をもっているからである。

〔サン・キュロット大衆に——公然たる武力による勝利を〕

人民の党派は自分たちだけで、ヴェローナ〔証拠書類 一三（補）の原注（2）を参照〕に崇拜的（ルイ十八世）がいる王党派とリュクサンブール宮に人気者たちがいる王党派を双方とも、どちらの助けも借りることなく、打ち破らなければならない。警戒されないようにするためと称して、われわれの敵対的意向を双方の王党派に対して隠そうとするのは狂気の沙汰であろう。ずっと前から、こうした意向は王党派に気付かれずにすんではいなかったのであり、彼らはその意向を打ち砕くために可能な限りのことをしてきたのである。〔しかし〕もはや彼らは、力と世論によってはその意向を打ち砕きえなくなっている。それゆえにこそ、彼らは策略に頼っているのである。われわれはしかし、この最後の手段についても彼らに勝利するであろう。私は公然たる手段を彼らに對置する。おそらく慎重分子 prudentes となる徒党のお人好しや間拔けたちは依然として、何らかの装いをまとして身を守る方が得策である、と言いつたであろう。私は、サン・キュロット軍の大衆が戦場に殺到することが絶対に必要であり、今やそうすべきときなのであり、そして、繰り返しになるが、その存在はもはや敵の目からは隠しえない、と述べておく。われわれはもはや、不意打ちによって敵に打ち勝つのも、打ち勝とうと願っているのではない。人民にいつそう相応しいやり方によってである。す

なわち、公然たる武力によってなのである。われわれは、自分たちだけでは何もなしえず、われわれには常に統治者たちが付いていなければならない、とわれわれに思い込ませるあの臆病さとはまったく無縁なのである。統治者たちは、永久に統治するためにのみ、さまざまな革命を行ってきた。「これに反して」われわれは要するに、真の民主政によって人民の幸福を永遠に保証するために革命を行なうことを望んでいるのである。サン・キュロットよ。幾人かの人物に對して単に非難を浴びせるといふ考えを退けよう。われわれが情熱を燃やしているのは、パンやゆとりある生活や自由のためなのである。したがってごまかされるがままになつてはならない。われわれが関心をもっている真の目標から注意を逸らしてはならない。幾度も繰り返して述べておくが、諸君は単独では、また自分たちだけでは何もできない、と思ひ込むことは誤りなのである。偉大で人民に相応しいことはすべて、人民によってのみ、また人民だけが存在するところでのみなされるであろう。したがって、人民に属する人びとが動き、姿を現すときまでは、動いてはならない。いかなる畏にも陥つてはならない。諸君の解放者を別のところに探し求めてはならない。他の旗印を認めてはならない。われわれの敵たちの欺瞞的な誘惑すべてを代弁するスパイたちが用いる、以下のような別の詭弁にもけつて惑わされてはならない。すなわち、スパイたちは、彼らには自分たちの兵士がある、と言う。しかし彼らは嘘を言っているのであつて、その兵士たちは彼らの兵士ではなく、われわれの兵士なのである。その兵士たちは、彼らの受けた教育そのものからしても、またそれだけでなく、現在の彼らの意向からしても、われわれの兵士なのである。そう。兵士はわれわれとともにのみ、またわれわれのためにのみ、進むであろう。われわれを迫害している極悪人たちがわれわれのもとに大軍を呼び寄せれば、しめたものである。さらに、彼らが大軍を増強すれば、なおさらよいのであつて、われわれはそのことによっていっそう強力になるであろう。万事休す、なのであつて、われわれと同じく人民に属し、われわれと同じ大義のみを抱いている、連隊に編入されているわが兄弟たちの間では、われわれの教説が根付いているのである。專制支配の側は絶えず兵士の配置換えを行っているが、思い違いをしている。到着した兵士たちは先にいた兵士たちから

さまざまな教訓を受け取り、立ち去る兵士たちは別の場所にわれわれが吹き込んだ信条を運んでいく。それゆえ、われわれの人民的な毒はいたるところに及ぶのである。もはや無理なことなのである。文民当局の厳しい詮索も軍隊での厳しい詮索も、わが兵士たちやわが労働者たちに（文書を）読ませないようにすることはもはや無理なのであって、彼らはむさぼるように読み、そこからきわめて激しくかつ夢中にさせてくれる酵母を取り出す。人民よ。それゆえ、諸君の味方（であるわれわれ）だけで諸君には十分なのである。われわれには諸君全体が、またすでに、「敵が」諸君に敵対させるべく惑わせるつもりでいたサン＝キュロット兵の大部分がついているからである。こうしてわれわれは、人民に属する人びとがこの幸福な日をわれわれに合図するときには、彼らに付き従って、また彼らの指導にのみ基づいて、人民の日に全員うち揃って確実な勝利に向かって前進しようではないか。

護民官、グラッキュス・バブーフ

訳注

〔1〕 本資料は、共和暦第四年ジェルミナル二四日（一七九六年四月一三日）付けの『護民官』紙第四二号に掲載された。バブーフに対する批判が狙いである。

〔2〕 紳士 *honnête homme* (ou *gens*)。紳士 *honnêtes hommes* なる語は、革命当初は、主としてジロンド派によって第三身分の指導者たち、すなわち中産階級および自由主義的貴族 *nobles* を指す言葉として肯定的な意味で用いられていた。しかし九二年後半から下層市民や細民に敵対する、さらには反革命的な人びとを指す軽蔑的な意味合いを帯びるようになり、それとともにジロンド派はこの言葉を用いるのをやめ、逆にジロンド派と敵対するサン＝キュロットなどがジロンド派に対して使用した。Cf. *Equipe "18^{ème} et Révolution", Dictionnaire des usages socio-politiques*, fascicule 1, 1985, Klincksieck, pp. 79-89.

〔3〕 原文では *Fer*、英訳版では *Fer* と記されているが、*Le Tribun du peuple (1794-1796) par Gracchus Babeuf, textes choisis et présentés par Armando Santta, Union Générale d'Éditions, 1969, p. 309* は *Ferru* とつづく。同じ

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

一九三（319）

フェリュ・フェンが第二章に記述のある、パンテオン・クラブ創設直前の会議に出席していた。

〔4〕 原文では Rich. としているが、Satta, *ibid.* はリシャル・Richard と記す。

〔5〕 原文では Soul. と記しているが、Satta, *ibid.* はスーレ・Soules としている。本翻訳では、以上三人について、サイッタに従ってその名を復元しておいた。

〔6〕 オーラールの編集した資料集によれば、共和暦第四年ジェルミナル二二日～二三日に国内軍その他の提出した報告、同二四日についての報告の中に、チュイルリ宮周辺でのボワシー・ダン格拉斯らに対する侮辱、不満の高まりが記録されている。 Cf. A. Auclard (ed.), *Paris* *op. cit.*, t. 3, 1899, Cerf, pp. 115-117.

〔7〕 ブオナローティが参照したものには印刷ミスがあったのであろう。この欠落箇所は、『護民官』紙の四ページ分というきわめて長いものである。訳者の判断で以下によって復元しておいた。 *Le Tribun du peuple ou Le Défenseur des droits de l'homme*, Paris, Editions d'histoire sociale, 1966, pp. 289-292.

〔8〕 反キリスト antechrist。キリストの名と権威とを否定する者。終末の世にキリストに対抗して現れる偽メシア。

〔9〕 ドージェ doge。ヴェネツィア共和国やジェノヴァ共和国で選任されていた総督（あるいは統領）。一七九七年にボナパルトが廃止。

〔10〕 ドマンジェによれば、平等派はパリおよびその近郊に駐留する国内軍に対する軍事工作人員の努力の結果、さまざまな部隊の合計一万人の兵士を当てにしていた、と考えていた。 Maurice Dommanget (*recueillies, commentées, annotées par*), *Pages choisies de Babeuf*, A. Colin, 1935, p. 294, n. 1.

〔11〕 本文書が掲載された『護民官』紙第四二号が発行されたのと同じ日に、グリゼルの執筆したパンフレット（『証拠書類九』）が配布されていた。

第四章 蜂起に向けて——警察隊の叛乱、そして山岳派との提携

蜂起のためのいくつかの措置

議論に供された第一の主題は当然のことながら、正統性を欠いたさまざまな権力機関を解体し、また、そのメンバーたちが平等に敵対する企みをいっさいしないようにするための方式であった。秘密総裁府の総意は、裏切り者たちを怖気づかせ、将来において人民が信頼感に基づいて尊敬することとなる人びと（議員たち）に畏怖の念を起こさせることのできる、偉大な正義の模範によって、これら二つの目標を達成することであった。

言語道断な裏切りおよび明白な権利侵害は、明らかに両院（五〇〇人院と元老院）議員および総裁府のメンバーたちが非難を受けるべき犯罪であった。きわめて善良な市民たちの血にまみれた彼らは、人民から主権を奪い取り、また、飽くことを知らぬ野心的なひと握りの金持ちが抱く要求のために国民の大多数を犠牲としていたのである。明白な懲罰が必要だったのであるが、しかし公正でありかつ救済をもたらしえた恐怖政治の時期の後に免罪と忘却が続き、この恐怖政治の後には、正統でありながら、あまりにも遅まきの爆発（「ジェルミナルおよびブレイアール」が記憶に残されただけであった）。

不満と不安を抱いている不幸なバリの住民の大多数は、過去を振り返り、テルミドール九日に先行する時期を懐かしんでいた。彼らが専制支配者たちを打倒するには大胆な共和主義者たちに指導されることだけが必要だったのであり、またそれらの共和主義者とは言えば、わが陰謀家たち *conjures* の合図を待っていたのである。

こうした状況の中でわが陰謀家たちは、重要な点は多数の勤労者を既存政府の影響力から守り、彼らをもっぱら民主派の影響の下に置くことにある、と気付いた。それゆえわが陰謀家たちは、蜂起の日には既存政府と市民たちとの間に

存在する関係はすべて打ち砕かれるべきであり、人民は秘密総裁政府が自ら選んだ人びと「工作員」に交付される旗の下に結集すべきであるとの決定を下し、また、いかなる命令であれ、専制支配的な権力機関の名においてその命令を与えたり、執行したりすることは、その蜂起の際には即座に死刑に処せられる国民的犯罪となる、と決定した〔証拠書類 一五〕を参照〕。

蜂起文書

準備されていた大掛かりな運動を整然と行なうために、秘密総裁府は自らがその運動の指導部であることを公然と表明し、この指導部としての資格で、人民が申し立てるべき諸要求、人民が従うべき道筋、人民が克服すべきさまざまな障害、そして人民が挫折させねばならない策略を人民に対し指し示すことが必要である、と判断した。

秘密総裁府はこうした目的で、長時間に亘る真剣な討議の後に、かの有名な蜂起文書を採択した。この文書の公表が、新たな革命の合図となるはずであった。

この文書は専制支配の解体に直接に関係する諸措置以外に、以下のような、秘密総裁府の有益な意図とその企ての正統性との根拠を人民に対して説明することを目的とする、いくつもの立法措置の萌芽を含んでいた。すなわち、

祖国の防衛者および貧窮者に対して、亡命者、陰謀家 *conspirateurs* として人民の敵たちの財産を配分すること、

陰謀家たちの家に貧乏な人びとを直ちに人居させること、

公営質屋に預けられている人民の衣類を無償で返還すること、

蜂起その他の中で命を失った市民たちの寡婦、子ども、父母、兄弟姉妹たちであって、生活に事欠いている人びとを人民が養子とすること、という措置である。

蜂起文書が命じた財産の配分は、共同体を達成することを目的としていた

財産を大々的に配分するという約束はわれわれが達成しようと望んでいた共同体の精神に反している、と見做すのは間違いであろう。重要な点は成功することであり、しかも、秘密総裁府は蜂起文書を軽々しく採択したのではない。そうではなくて、その目標を達成するには、秘密総裁府の真の友たちを遠ざけることになりかねないがゆえにあまりに慎重であってはならないし、また、その敵の数をあまりに大きくすることとなるがゆえにあまりに性急であつてもならない、ということに気づいていたのである。

配分を約束することによって、秘密総裁府は、新しい貴族支配 *aristocratie* を憎みつつも、だからといって事実上の平等を好んではない人びとの反感を買うことなく、勤労階級の注意を引き、彼らに期待を抱かせ続けていた。財産を配分するということは、土地所有を細分化することを意味していたのではない。なぜなら、真の財産は土地ではなくて、土地がもたらす果実だからである。ところで、果実を配分するにあたって、その約束は完全に果たされるのであり、それこそが、後で見る「第六章」ように、秘密総裁府が行なおうと自らに課していたことであつた。

専制支配を解体した後のバリの民衆の集会

専制支配を解体した直後に、バリの民衆は革命広場（現在のコンコルド広場）における総会 *assemblée générale* に招集されるはずであつた。そこにおいて秘密総裁府は、総会に対し自らの活動を報告し、人民が不満を表明していたすべての災禍が不平等の結果であることを総会に示し、一七九三年憲法から当然にも期待すべきさまざまな利点を総会に想起させ、蜂起文書を承認するよう総会に勧めることとなつてゐた。その後、蜂起した人民に対して、革命を終了させること、そして人民的な諸制度が作動するまで統治することを任務とする、暫定的な権力機関を直ちに創設するよう提案することとなつてゐた。

新たな国民議會

勝利した人民から彼らの真の利害に合致したデクレを手に入れるために、総裁府は、非常に高い信頼を受けるにふさわしいと判断した民主派の名前を人民の投票に委ねるつもりでいた。この新しい議會は、万人の救済のために身を捧げることを天地神明にかけて誓い、以下のデクレによって新議會に定めさせるよう提案されていたさまざまな命令を忠実に執行することを誓うものとされていた。

蜂起したパリの民衆に提案すべきデクレ

「パリの民衆は、専制支配を打倒した後に、自然から授かった諸権利を行使しつつ、

財産および労働の不平等な配分が国民の隷属状態と不幸とを際限なくもたらす源泉であること、

万人の労働が社会契約の必要不可欠な条件であること、

フランスのあらゆる財産の所有権はもともとフランス人民にあるのであって、フランス人民のみがその配分を決定し、

変更することができること、

以上のことを認め、かつ、フランス人民に対して明言し、

パリの民衆がすべてのフランス人のために、またすべてのフランス人の名において創設したばかりの国民議會に対し、

一七九三年憲法を改正するよう、その早急な執行を準備するよう、また、上記の広く認められた真理に基づく賢明な諸

制度によって、揺るぎない平等、自由そして幸福をフランス共和国に確実に得させるよう命じ、

上記議會に対し、遅くとも一年以内に本デクレの執行状況について報告するよう厳命し、

また最後に、上記の命令に合致した、この議會のさまざまなデクレを尊重させ、本デクレが議員たちに命じたばかり

のさまざまな義務から外れる議員たちは裏切りの罪で処罰することを誓う」。

われわれは後の方〔第六章以下〕で秘密総裁府がいかなる法律によって共和国の運命を定めることを意図していたか、検討することとなる。しかしまずは、ごく詳細に知らせるべき陰謀の経過を、その展開にしたがってたどることとしよう。

警察隊の蜂起

われわれ総裁府がその壮大な企てのあらゆる部分を秘密裡に練り上げている間に、その煽動の効果が、バリおよびその周辺に駐屯していた武装部隊の中で、とりわけ警察隊〔第三章訳注〔19〕を参照〕の中と立法府警備担当の精鋭兵たちの間で現れ始めていた。

軍部からすでに数多くの兆候を指摘されていたこの反逆精神ほど、政府を不安に陥れたものはなかった。政府の考えでは、人民の怒りに唯一対抗しようと自慢していた盾がそれによって消え失せたからである。それゆえ政府は、警察隊に対してあらゆる懐柔手段を尽くした後に、法律によってこの都市〔パリ〕の外部ではけっして任務につくべきではないとされていたこの部隊のうちでもっとも反抗的な二大隊をバリの外に出す命令を下さざるをえなくなった。フロレアール九日〔九六年四月二八日〕に通告されたこの命令の後に明白な不服従運動が生じたのであり、その直後から人民の間での騒擾が増加した。そこで、専制支配に易々と勝ちうるような機会が近づいた、と考えられたのである。

秘密総裁府は、警察隊員たちの反抗を直接に引き起こしたわけではなかったが、それでもたえず広めていた行動方針によってその反抗を起こさせることに貢献したのであって、やはり、首尾よくことを運ぶときが迫っていると考えた。そこで秘密総裁府は、必要としていた情報のすべてをいまだ掌握しきっていないかっただけとはいえ、政府の側からの最初の努力を撃退し、そのことによって人民の信頼を高めるのに足りる勢力を警察隊の中に見出すことを確信したならば、蜂起の口火を切る決断を下すものとされた。

この拠点を構築するためにあらゆる策が講じられたのであり、東の間のことではあったが国内軍総蜂起の希望が生じた。幾人かの革命工作員が部隊の中に散らばっていき、また他の幾人かは人民を進軍させる準備を整えていた。警察隊内部に急遽設けられたある委員会は、すでにジェルマンを介して秘密総裁府と連絡を取っていた。警察隊から人民への宣言文と、人民の名で陰謀家たちによって出された人民の回答は、勇敢な市民たちに対し彼らが遂行すべき任務を指示していた。民主派は戦闘態勢に入っており、まさにすべてが動き始めていたのである。しかしそのとき、叛乱した大隊が不意に帰順したために、祖国に対して取り返しのつかない敗北を招いてはならないという判断から、動きを中止させねばならなくなった。

警察隊の解散

警察隊解散のデクレ（共和暦第四年フロレアル一〇日（九六年四月二九日）のアレテ）によって、搖籃期の蜂起は押さえ込まれてしまった。かなりの数の隊員が喜んでそのデクレに従った。国境〔に送られた際〕のさまざまな危険という不安が彼らの幾人かにとって抵抗の真の動機であったことをわれわれが悟ったのももともとであって、共和主義的兵士たちがこの抵抗は高潔な祖国愛による、としたのはきわめて軽率なことであった。

警察隊員たちが愛国派の居宅に逃げ込む

この不服従運動の原因はおそらくは不明のままに終わるであろうが、いかなる原因によるものであったにせよ、民主派は、好意的な隊員たちだけでなく、政府の命令に服した隊員のほとんどすべてをも自分たちの住居に引き止めることによって、彼らを意のままに使うという利点をその運動から引き出した。この多数の〔隊員の〕脱走から、秘密総裁府が蜂起軍の前衛に配置するつもりでいた部隊が形成された。この騒然たる出来事は人民の苛立ちを高めたのであり、

日に日に強まるその激しさは、陰謀の決着をこれ以上遅らせれば、必ずやきわめて深刻な危険をもたらしかねないことを警告していた。明らかに空しいものとはなりはしたが部分的な運動が発生しかけていたのであり、また他方では、仲間を煽動して抵抗に引き込んだとして幾人かの隊員が逮捕されて失われる事態も避けられないように思われていた。そこで秘密総裁府は、誤った動きを未然に防ぎ、専制支配者たちの権力を粉碎しなければならなかった。こうした状況から、秘密総裁府は蜂起の時期を急がざるをえなくなった。フロレアル一〇日〔九六年四月二九日〕のことである。

われわれ陰謀家にとって二つの事柄、すなわち、慎重さ——これがなければ、いかなる成功も不可能である——と、誰も予想できないさまざまな障害を取り除くための大胆さとが不可欠であると思われていた。われわれは、前者を導きの糸としつつ、一貫して後者を義務とした。大詰めを早めることを望みつつ、パリの住民を動かすために民主派の活力を頼りにしつつ、大衆の苛立ちを知っていたがゆえに、また脱走した警察隊員たちの部隊と指導者の精神に関して十分に安心していたがゆえに、われわれ陰謀家は、自分たちの擁する勢力にごく適切な手はずを整えさせようと考えたのである、まさにその目的を達成するために、民主政への愛と軍事作戦の経験とを兼ね備えた同志たちを周囲に集める必要があると判断した。すべて將軍あるいは將校であったフィヨン〔少將。第三章訳注〔18〕を参照〕、ジェルマン〔大尉。『序言』訳注〔6〕を参照〕、ロシニョル〔少將。第三章訳注〔25〕の補注〔*1〕を参照〕、マサール〔大尉、參謀副官。第二章訳注〔13〕を参照〕そしてグリゼル〔大尉。第三章訳注〔22〕を参照〕が、フロレアル一日〔九六年四月三〇日〕の午後、秘密総裁府の会合〔グランドトリュアンドリ街二七番地〔中央市場のすぐ北〕のティソ宅で〕に呼び出された。グリゼルが参加を認められたのは、彼がグルネル兵營に対して影響力を及ぼしていると思われるからであった。

共和暦第四年フロレアル一日の政治Ⅱ軍事會議

この會議には、バブーフ、ドゥボン〔第二章訳注〔5〕を参照〕、ダルテ〔序言〕訳注〔2〕および第二章原注〔15〕を参照〕、マレシャル、ディディエ〔第二章訳注〔65〕を参照〕、そして上記五人の軍人が出席した。秘密総裁府はまず、自らの活動の目標、到達点、そして今後まだとらねばならない道筋を五人の軍人に対して知らせた。次いで秘密総裁府は、彼らに蜂起文書〔証拠書類 一五〕について知らせたところ、彼らはそれに同意した。最後に、人民の勝利を確実なものとするための手段について秘密総裁府と協議するよう彼らに促した。

秘密総裁府は、あらゆる措置の構想と運動の最高指導を自らの任務として留保しつつ、攻撃と防禦に備える役割を軍事委員会 *comité militaire* に託し、これに関する情報をこの委員会に渡すことが決定された。

前記五人の軍人がこの新しい委員会のメンバーに選任され、その第一回の會議は、翌日、モン・ブラン街〔現在の第九区ショセリダンタン街〕にあったレ〔第三章訳注〔2〕を参照〕の居宅で、と決められた。

先ほど述べた全体會議においては、ジェルマンは熱烈な民主政支持の態度を示し、マサールはアマール宅で示していた毅然とした性格に反するところはなかった。グリゼルは共和主義者の役を完璧に演じていた。フィヨンとロシニョルは、秘密総裁府の見解に賛成しつつも、そこに山岳派の元公會議員が見られないことを残念に思っていた。

この會議の数時間後、バブーフの隠れ家と秘密総裁府の會議〔場所〕は、フォブール・モンマルトルのルクール宅に移された。そこには、その陰謀の一部をすでに知っており、当時その陰謀が引き起こしたさまざまな活動と若干のかかわりをもっていた『人民の啓発者』紙編集者も匿われていた。

軍事委員会

ジェルマンが、新しい委員会が秘密総裁府との間で連絡を取るただひとつの手段であった。レの居宅から数日後にア

ル・オーブル（小麦市場。現在はフォロム・レ・アルの西、ヴィアルム街の商品取引所）近くにあったクレレックス（第三章訳注〔3〕を参照）の居宅に場所を移したこの委員会は、自らに託された仕事について迅速に検討を加え、その検討結果を「フロレアル」一五日（九六年五月四日）に前述の総裁府の手に委ねた。

民主派の計画に王党派を協力させる提案がなされた

陰謀家たちがあらゆる所から受け取った数多くの提案の中で、とりわけ二つが彼らの注意を引いた。

ひとつは、やはり政府に敵対していたが、その後蜂起の真の目的が公表されると期待を裏切られることとなる王党派を、政府打倒に向けて巧みに協力させることを陰謀家たちに勧める提案であった。この提案は退けられた。やがて（敵として）闘わねばなくなる人びとをまず武装させることはきわめて危険であると判断されたからであり、また、蜂起者の隊列の中に王党派が存在するだけで共和主義者の氣力をそぎ、共和主義者たちが秘密総裁府のさまざまな措置に寄せていた信頼感を損なうのに十分である、と思われたからである。

総裁政府を排除しようという提案

第二の提案を通じて、警察隊の二人の将校から、そのうちのひとりが愛国的な兵士からなる分遣隊を率いて警護に当たっている総裁政府のメンバーたちを同じ夜に殺害するとの申し出があった。さらに彼らは、民主派の部隊による掩護を、したがつて蜂起の開始を求めていた。彼らの計画の実行を容易にするために、彼らは合言葉を打ち明けてもいた。この提案も同じように却下された。あらゆる措置を同時一斉に行なうことによって成功がほぼ確実となるときまでは、何ひとつ試みられるべきではない、という理由からであった。

確かに、大掛かりな準備が整えられていた。例えば、法体系（の検討）は日に日に捗っていたし、積極的な愛国主義

者が確認され、整理されていたし、蜂起文書と人民の結集の軸となるべき小旗とが印刷され、工作人員たちに配られてもいた。また、大衆の苛立ちも極限に達していたのである。

しかし、いたる所で同時に人民の大規模な運動を開始するために用いるべき手段について軍事委員会がいまだ意見を述べていなかったことに加えて、秘密総裁府は、幾人かのきわめて有用であるが、貧乏な人の暮らしを支えるために必要とされる資金をいまだもっておらず、また、蜂起した人びとに補給すべき火薬も確保しえなかった。

陰謀家たちは金銭を輕蔑していた

資金不足はおそらく、われわれの陰謀のもった最大の特徴であろう。富に対する愛着は陰謀家たちからは罪惡であると思われていたのであり、秘密総裁府は、文書印刷のために、また使っていた貧しい民主主義者たちの生活費のためにどうしても必要なもののみを、愛国者たちからの寄付によって手に入れようとしただけであった。しかしながらこの種の資金は、専制支配の手先を幾人か買収するためであれ、惑わされている兵士たちを喜ばせ、目覚めさせる機会を民主主義者たちに対して提供するためであれ、不可欠のものであった。それを手に入れようとする程度働きかけがなされた。しかし、秘密総裁府が自由に使えた最高金額は、同盟関係にあったある共和国の公使から送られた、正貨で二四〇フランという額であった。しかしこれは、フロレアル二一日（九六年五月一〇日）に陰謀家たちが会議を開いていた場所に侵入した警官たちに押収された。

理性が認める手段のみによって善を行なうことは何と難しいことであろうか。謹厳な共和主義者にとって、自らの企てが失敗に終わるのを目にせず、また新たな不幸に立ち会うことがないようにするために、理性の命ずるさまざな義務を果たし、そうした義務にそれと気付かないでいる人びとを使うことは、何と高くつくことであろうか。以上が、軍事委員会を創設して以来、秘密総裁府が置かれていた苦しい状況であった。

ロシニョルとフィヨンが山岳派を秘密総裁府と提携させることを懇請

ジェルマンはすぐに、ロシニョルとフィヨンが秘密総裁府のやり方を心底から承認しているのではないことに気付いた。山岳派議員たちと強い結びつきがあったこの二人には、山岳派議員が秘密総裁府に加わっていないことがなかなか理解できないでいた。やがて彼らは、もうその考え（秘密総裁府への山岳派議員の参加）だけで頭がいっぱいとなり、それが受け入れられない場合の彼らの忠誠に関して疑いの念を抱かせる理由となった。

ここで問題となっている山岳派とは、テルミドール九日以後に追放された公會議員たちのことであり、すでに見たように（第三章「追放された公會議員たちの委員会」の項以下を参照）、一七九三年憲法を復活させる意図から委員会に結集していたのであるが、秘密総裁府の方はその委員会のさまざまな努力を妨げる必要があると判断していた。

フィヨンとロシニョルの考えでは、これらの山岳派を遠ざけていたさまざまな理由は取るに足らないものであった。彼らにあっては、個人的な愛着が政治的理由に勝っていたからである。また彼らは、これら元議員が姿を見せれば、魔術のような効果をもたらし、共和主義者たちの微妙な見解の相違を忘れさせ、蜂起を急速に広め、諸県においてさまざまな抵抗に打ち勝つことになる、と確信しているように思われていた。

幾人かの同志がこれと同じ見解を抱いていた。しかも、たとえフィヨンとロシニョルに倣う者はいなかったとしても、彼らに対して交渉の申し出があったことから、また、とりわけロシニョルがフォブール・（サン＝）タントワーヌの住民たちに影響力を及ぼしていたがゆえに彼らにさまざまな任務が期待されていたことから、秘密総裁府は彼らの意見を大いに考慮せざるをえなかった。

山岳派は蜂起を横取りすることを狙う

その間に、ロベール・ランデを補佐役に据えたばかりの山岳派委員会が、委員会結成の目的を忘れるどころか、民主

派によって企てられた運動であるにもかかわらず、その運動の最中に自らのメンバーを登場させることによって、また、人民に對し彼らをその唯一の代表であるとして提示することによって、その運動を横取りできると思っており、その運動を使って目的を果たすつもりでいる、との報告がわれわれ総裁府に對してなされた。

ドゥルエが蜂起派と結びつく

他方で、その献身ふりと勇氣とによって有名であったドゥルエ「序言」訳注〔3〕の補注（*1）を参照）が、バブーフのさまざまな計画を知り、ダルテ〔第二章原注（15）を参照〕と密接に結びつき、そして平等に有利な革命を望んでいた。そこで秘密総裁府は、彼の人氣を蜂起推進のための力とすることを期待していた。しかしドゥルエは、昔の仲間である山岳派の活動と無関係ではなかったのであり、二つの陰謀をただひとつに融合 fusion することの方を好んでいるように思われていた。

秘密総裁府の優柔不斷

最後に、ジェルマンが総裁府の当惑を頂点にまで引き上げた。彼はフィヨンとロシニョルの意図に對して激しい懸念を表明したのであり、山岳派の野心によって増大しつつある障害について不安を覚えてるように思われた。この山岳派の野心についてはその構想がリコール〔第三章訳注〔43〕を参照〕とレニュロ〔同〔44〕を参照〕からジェルマンに打ち明けられていたのであり、また同時に彼らはジェルマンに對して提携 relation を公式に提案していたのである。ジェルマンは彼らが先に名前を挙げた二人の軍事委員会メンバーと通じていることを信じて疑わなかった。

常に秘密総裁府のさまざまな活動に積極的に参加していたドゥボン〔第二章訳注〔4〕を参照〕は、これら山岳派を秘密総裁府に結びつけ associater ようという提案を聞いて、冷静さを保つことができなかった。彼は、フランスに重く

のしかかっている災禍について山岳派を非難し、次のように訴えた。「あるいは野心から、あるいは虚栄心から、あるいは嫉妬から、またあるいは無知から自由を破壊に追いつた連中に対して、自由を救うという栄光に加わるよう呼びかけることによって、諸君は自分たちの崇高な企てを汚そうとでもいうのか。祖国に対するもつとも毅然とした支持者たちをテルミドール九日に暗殺することによって、貴族支配に対しそれが失った権力を返還し、王党派の期待を再びかき立てた連中が、彼らの間に交じっているのではないのか。諸君は、彼らが最初に自由の友たちに対する反革命的殺人を激化させたことを忘れたとでもいうのか。彼らにほんのわずかであれ影響力を取り戻させることを恐れねばならない。彼らは、それを用いて共和派を欺き、分裂させることに役立てることになるのだから。ロベスピエールと彼の殉教仲間のことを尊敬の念をもって語ってみるがいい。〔すると〕今もお彼らは、偏狭者、*sectaires* や吸血鬼や独裁執政官、*dictatoriaux* や専制支配の手先という呼び方を盛んに諸君に浴びせるだろう。徳義や道徳や神性に対して敬意を払ってみるがいい。〔すると〕彼らは、諸君を狂信家や穩健派 *modérés* や詭弁家と呼ぶだろう。人民に対してさまたげな分別ある助言を与えてみるがいい。〔すると〕彼らは、自分たちだけがすべてを計画し、すべてを指導する力の保持者であると主張するだろう。……彼らとは敵対し、反目するほかないだろう。彼らは惑わされただけだ、と諸君に言う者もあるだろう。しかし彼らはけっしてそうは認めないだろう、と私は考えている。彼らが許されても、また彼らの過ちが忘れられてもいい。しかし彼らを永遠に黙らせていただきたい。真理と正義への道を彼らとともに歩むことはできないからだ」。

ドウボンにとっては、いかなる形であれ国家の建て直しにこれらの山岳派を協力させえないことは、あまりにも明白であった。それゆえ彼は、提案されている提携よりも完全な無為無策の方が好ましい、と考えるようになっていた。蜂起を断念するというこうした意見は、秘密総裁府に不快感を与えたのであり、そのメンバーのひとりとは驚きのあまりそれを忘れて、ドウボンの臆病ぶりを責めさえた。その結果生じた口論はやがて収まったが、その口論の引き金となっ

た意見は陰謀家たちの心に深く刻み込まれ続けることとなった。最良の民主派が犠牲となることは人民にとって何の利益ももたらさず、人民がいっそう抑圧されることにしかならないのであって、彼らは、こうした事態にならないようにするには、いかに慎重が必要とされるか、ということをかつてないほど感じ取ったのである。

山岳派との提携からは、目論んでいた改革にとって不都合な事態が結果として生じるにいたる、ということがはっきりと語られていた。しかし、彼ら山岳派の厚かましきは、そして何よりもフィヨンとロシニョルの見解は、陰謀の鹵軍装置すべての動きを阻みかねない障害であると思われていた。

山岳派の過ち、そしてその結果としての恐ろしい災禍が、絶えず陰謀家たちの心に浮かんできていたのであり、また、永遠の平等の樹立が大いに待ち望まれているときに、その樹立をこれら元公會議員たちの勝手な決断に期待しえないことは彼らにとっては明白であった。

この平等を断念しつつも陰謀に固執すれば、首尾一貫性を欠き、また野心的を抱いていることを自ら認めることとなったであろう。しかし、すべてが陰謀の迅速な成功を予想させているまさにそのときに、陰謀の流れを断つことは、愛国者たちおよび後世の人びとの目からすれば犯罪的なこととなったであろう。したがって初期の決定にあくまでもこだわり、人民の大義にもっとも好都合な形で状況を利用しなければならなかったのである。

秘密総裁府は山岳派との提携を決定

長時間にわたる激論の末に、秘密総裁府は提案されていた提携を採用し、それと同時に、山岳派の野心を抑えるために、また秘密総裁府の意図を実行することに彼らを協力させるために、大いに予防策を講じることを選定した。

この提携を採用した際に示された説明によれば、国民公会を復権させることが、すなわち、ただひとつ正統であり、かつ依然として合法的に存在するものとアマールが見做していた〔第二章〕「共和暦第三年の政府に取って代わるべき権

力機関」の項を参照〕、この機関「公会」のその部分「公会から追放された議員たち」を復権させることが約束されていた。しかし、何の変更も伴わないままにそれがなされたならば、フランスは、きわめて厳しい非難を受けている人びとの思い通りになってしまったであろう。これほど大きな災厄を回避するために、秘密総裁府は、山岳派が「以下の諸条件に」同意するかぎりにおいてのみ、公会の再招集が行われる、とする決定を下したのであった。

この提携の条件

- 一、追放された議員のみで構成される国民公会に、蜂起した人民が秘密総裁府の推薦に基づいて選任する、一県につきひとりの民主主義者^①を加えること、
 - 二、蜂起文書第一八条^②の諸措置を、全面的に、かつ直ちに実行すること、
 - 三、蜂起の日に、パリの人民によって発せられるデクレに従うこと、
- がその条件であった。

この決定が下されてすぐ、ジェルマンは、以前に幾度か会議を開いたことのあった、グランドリトリュアンドリ街のティソ宅^③に直ちに場所を移した秘密総裁府に、次の日、山岳派委員会の一メンバーを連れてくる許可を得た。

山岳派委員会からの使者が秘密総裁府に紹介された

フロレアル一五日〔九六年五月四日〕の朝、ジェルマンは山岳派委員会の使者リコールを秘密総裁府に連れてきた。彼はある演説^④で迎えられたが、その中で秘密総裁府は、状況について、彼を使者として委任した人びととの提携という考えをすべて遠ざけてきた理由について、そしてこの提携をその後になつて承認した理由について彼に知らせた。その山岳派議員に対して蜂起文書が読み上げられ、直ちに、どうしても設置しなければならない暫定的な権力機関に関する

条文（証拠書類 一五）第一九条）について変更を加えるべきかどうかをめぐって討議が生じた。追放された国民公会議員たちを最高権力に呼び戻す件は難なく合意を見たが、これと同時にその使者に対しては、山岳派が自らの人民的意図について反論の余地のない保証を与えなければ、交渉はすべて打ち切られることとなる、とも述べられた。彼には、手心を加えることなく、単刀直入に話がなされたのであり、また、彼を使者として送った人びとは激しく非難さるべき対象であって、彼らを信用してはいない、と彼に申し渡した。

リコールには彼の同僚全員については弁明を行ないえなかった。しかし彼の言によれば、同僚の間には人民の非難を受けるだけのことをしてはいない者もいるとのことであった。われわれは彼に対して先に引用した三つの条件を説明し、さらに以下の条件が一致して付け加えられた。すなわち、

共和暦二年テルミドル九日以來発せられたすべての法律およびデクレの停止、
歸還した亡命者全員の追放、という条件である。

山岳派による拒否

リコールは、彼の同僚たちの承認を除くすべての点に同意した。しかし翌日（フロレアル一六日（九六年五月五日））、彼は同僚たちの拒否を告げにやってきた。

山岳派委員会の見解によれば、蜂起が直ちにもたらす唯一の結果は追放された公会議員約六〇人の復帰であるべきであり、その後のさまざまな措置について彼らを絶対的に信用しなければならぬ、ということであった。

一県につきひとりの民主主義者を付け加えることも、国民主権への侵害であるとして山岳派に拒絶された。彼らのみが国民主権の受任者であるから、というのが拒絶の理由であった。彼らの見解では、蜂起した人びとによって彼らに命じられることを秘密総裁府が望んでいたさまざまな命令はどれも、自分たちだけが代表する役目を担っているフランス

人民の諸權利に対する侵害なのであった。なるほど彼らは、蜂起文書の中で約束されていた人民に住居および財産を手に入れさせようと望んでいたが、それは氣前のよき *bonapartiste* を求める動きに政治的に讓歩する意味においてであつて、決してそれらの命令を実行する意味においても、また人民の諸權利を承認する意味においてもなかった。最後に彼らは、秘密總裁府のメンバーたちに対し、彼ら〔山岳派〕が樹立するつもりでいる執行評議會 *conseil executif* に秘密總裁府のメンバーたちを選任する、との提案を行なっていた。

秘密總裁府の反論

山岳派の使者に対する以下の反論を読んで、読者はきっと大きな満足を感じるであらう。

「われわれは公会の一部を暫定的に復歸させることに協力しているが、その際われわれの念頭には人民に奉仕することしかない。われわれが切に望んでいる唯一の褒美は、平等の完全な勝利である。われわれは、人民に対し彼らの諸權利を完全に回復させるために戦い、そして命をも危険にさらす。しかしわれわれは、自分たちがあらゆる事物の主人〔人民〕に対して氣前がよい *bonapartes* などと言ひ張りうるとは思つてもいない。われわれが忙殺されている偉大な事業のために本当にわれわれとともに立ち働くことを諸君が本当に望んでいるのなら、諸君の意図に胡散臭さを感じさせることとなる提案をしたり、申し出をしたりしないよう氣を付けたまえ。

君の幾人もの同僚は人民の信頼を裏切つたのであり、もしわれわれが再び彼らの情念や弱氣に人民を委ねることに同意したならば、われわれは彼らよりもはるかに非難されるべきこととなる。人民主權の回復のために、その人民主權を破滅に追いやった手段を用いねばならないなどとは思ひも及ばない。專制支配を破壊してくれることを國民が期待している人びとにこそ、國民は必要不可欠の暫定的措置をとる權利を委ねて当然なのである。

われわれは、やはり抑圧的な政府に置き換えるために、ある抑圧的な政府を倒すことを望んでいるのではない。過ち

は赦すべきである。しかし祖国を破壊に追いやるという過ちを犯した人びとに対して再び祖国の運命を委ねるなど、狂気の沙汰であらう。

テルミドール九日に人民の最良の友たちを殺し、また、それ以来卑劣にも共和主義者たちを断罪し、民主政の機構を破壊した人びとのなすがままに再び人民を委ねるよりも、われわれの無為に憤慨して、われわれの意気地なさや裏切りを責めかねない愛国者たちの手で、さもなくば、われわれの試みをついには察知しかねない政府の手で命を失った方がよい」。

退出するに際してリコールは、彼に任務を託した人びとの最終的な決定を秘密総裁府に伝える旨、言明した。

愛国者たちの不安

以上のようなことが秘密総裁府と山岳派委員会との間で行なわれているときに、幾つかの不吉な噂が愛国者たちを不安に陥れ、彼らの意気を阻喪させていた。主要な陰謀家たちが疑惑と中傷の的となっていたのであり、また、きわめて激しい不満が高揚した後の静けさは新たな災厄の前兆であるとして一般に見做されていた。こうした不吉な予感、すべての足並みを揃えるための時間を設けるべく、時期尚早の高揚を抑えるよう勧められていた革命工員たちの間にも少しくずつ広まっていた。自らも狼狽し始めていた工員たちは、これ以上長期にわたって遅滞すれば、武器を取ろうときわめて強い決心をした人びとからの信頼を失ってしまう、と秘密総裁府に通知してきた。

こうした不安をすべて払拭するために、秘密総裁府は秘密総裁府が置かれている状況と、秘密総裁府の前進を妨げているさまざまな障害について工員たちに描いてみせることに決めた。しかし秘密総裁府は、彼らに宛てた通達がいまだ書き写されていないときに、山岳派が秘密総裁府の諸提案に同意したところであることを知った。

秘密総裁府の山岳派委員会との提携

事実、フロレアル一八日（九六年五月七日）の夕方になって、ダルテが、彼も出席した会議（五月六日夕方にリコール宅（現在のコンコルド広場に面した海軍省東横のサン・フロランタン街五番地）で開催）において、山岳派委員会が激しい議論の末に、一県につきひとりの民主主義者を付け加えること、貧困階級に恩恵を与える諸措置、そして蜂起したパリの民衆が要求するよう提案されていたデクレの実施に同意した、と秘密総裁府に報告してきたのである。同時に彼は、リコールが述べていた反対意見は、アマールによって、またとりわけ、秘密総裁府の不信の根拠を説明した後、真に人民的な性格を欠いた革命は彼が言うには党派ゲームでしかなくなるがゆえに、そうした性格を革命に与える必要性について詳しく述べたロベール・ランデによって見事に論破された、と語った。この知らせは直ちに工作員たちに通知されたのであり、そのとき以来、われわれはもはや、陰謀の大詰めを急ぐことしか考えなかった。

原注

- (1) 「証拠書類 一五（蜂起公安委員会から人民へ「蜂起文書」を参照）。
- (2) 国内軍 *armée de l'intérieur*。テルミドール九日以来、自由の友たち畏怖の念を起こさせるためにパリ周辺に駐屯させられていた軍隊は、当時このように呼ばれていた。
- (3) 「証拠書類 一六（パリのサン・キュロット民衆から警察隊へ）」を参照。
- (4) この会議を招集した際に、秘密総裁府は自らを創設した「組織」規約第三条（第一七一号所収の「証拠書類 四」を参照）に背いたのであり、こうした誤りがなかったならばグリゼルは陰謀の指導者たちを知ることにはなかったのであって、これが彼らの計画の破滅をもたらした主要な原因であった（グリゼルが総裁カルノーに対して陰謀の存在を初めて通報したのは、この会議の翌々日、五月二日のこと）。
- (5) 「証拠書類 一七（手渡すべき覚書）」を参照。
- (6) ペーシュ（*1）とステューヴ（*2）。

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

訳注

- 〔*1〕 ベーシエ Pêche (生没年不詳)。警察隊の大尉。ダルテの紹介で軍事委員会の会合に出席。フロレアル末に逮捕されたが、告訴されず、数日後に釈放された。ヴァンドーム高等法廷においてバブーフらはベーシエをスパイとして非難した。Robert Legrand, *Babeuf et ses compagnons, Société des Etudes robespierristes*, 1981, p. 229 は「ベーシエが三〇〇丁の銃と二〇〇人の兵士を用立てる提案を行なった」としている。
- 〔*2〕 ステエヴ Steve (生没年不詳)。密偵の報告に基づいて当局が作成した名簿には「陰謀に参加」したとして記載。Cf. Legrand, *ibid.*, p. 251.
- 〔7〕 「証拠書類 一八 (山岳派委員会の使者に対する演説)」を参照。
- 〔8〕 「証拠書類 一九 (共和暦第四年フロレアル一八日 (九六年五月七日) 付けの「秘密総裁府から一二区の工作員たちに」を参照)
- 〔1〕 ルクール Lecoq。不詳。Legrand, *op. cit.* にもこの名前は出ていない。
- 〔2〕 『人民の啓蒙者』紙編集者。同紙の題字下には編集者は S・ラランド Sébastien Lalande と記されている。ブオナローティはラランドをシモン・デュブレのことであるとしたが、バブーフその人を指すものと思われる。だとするとしかし、ここでの記述にやや矛盾が生ずることとなるが、第二章訳注〔10〕および第三章訳注〔27〕を参照。
- 〔3〕 この公使については、バタヴィア共和国公使のブラウ Braw である、とされる。柴田、前掲『バブーフの陰謀』二〇七ページ。Armando Santia, *Filippo Buonarroti, Contributi alla storia della sua vita e del suo pensiero*, Volume secondo, Edizioni di Storia e Letteratura, 1951, pp. 31-33.
- 〔4〕 フィヨンについては山岳派議員との関係は不詳。ロシニョルにはコルドリエ・クラブの指導者たちとのつながりがあった。ジェルミナール一六日 (九四年四月六日) に解任されたのは、公会でコルドリエ派がロシニョルを擁護したことによる。テルミドール九日の後、逮捕。プレリアール蜂起の後にもアム監獄に収監された。
- 〔5〕 ロシニョルは革命勃発時にフォブール・サン・タントウヌの入り口のシャラントン街に住んでおり、パステイユ襲撃にも参加した。キャインズ・ヴァン・セクションで積極的に活動し、九一年八月一〇日の蜂起コミューンにも参加、パリ市

(「コミュニオン」) 総評議会議員に。バスティーユの勝者で構成される部隊を率いてヴァンデに赴き、戦功を挙げ、国民公会から「共和国の兄」と評価された。こうした経緯からロシニョルはフォブール・サン・タントワヌにおいて住民からの強い支持を得ていたと思われる。

- [6] ランデ (ジャン・バティスト・)、ロベール (Jean-Baptiste) Robert Lindet (一七四六年ウール県ベルネー一八二五年パリ)。弁護士。九一年にウール県選出立法議会議員、九二年に国民公会議員として再選。山岳派に同調した議会活動を展開。九三年四月七日からロベスピエールの失脚後の九四年一〇月六日まで公安委員会のメンバー。ダントン告発に関してはロベスピエールに反対。しかしテルミドール後もジロンド派逮捕、最高価格令などを正当化し続けていた。九五年春に反動が激しくなると、山岳派と連携。逮捕され、公会から追放。九五年九月にノール県から再選されたが、総裁政府によって無効に。その後、九三年憲法の実施を求めて、バブーフら民主派とコンタクトを取った。「陰謀」発覚後、共謀の容疑で逮捕され、ヴァンドーム裁判にかけられたが、釈放。九八年四月には五〇〇人院議員に選出され、無効とされるも、九九年七月には財務大臣に。ボナパルトによるクーデタの後、弁護士業に復帰。なおロベール・ランデの兄で、聖職者身分から三部会議員に選出されたが、憲法制定国民議会で非キリスト教化を推進したロベール・トマ・ランデ (Robert-Thomas Lindet 一七四三年ベルネー一八二三年ベルネ) は、公会議員にも選ばれ、九四年夏以降、またヴァンドーム裁判の際には弟を弁護。
- [7] 『バブーフ宅押収文書』には国民公会メンバーとして追加すべき民主主義者の名簿が二つ、バブーフ、ブオナローティらによるものと筆耕ビエによるものとが収録されている。前者では二五県について、後者では三七県について名前が空白のままである。Haute Cour de justice, *Copie des pièces saisies dans le local que Babeuf (sic) occupait lors de son arrestation*, Imprimerie Nationale, 1796, pp. 69-72 et pp. 77-80.

- [8] 「証拠書類 一五」を参照。ただし、ブオナローティが記す第一八条は「公および個人の財産は人民の保護の下に置かれる」と規定するだけである。亡命者等の財産を祖国防衛者、貧しい人びとに配分すること、陰謀家の住居を貧しい人びとに供すること、質草を即時無償で返却することなどを規定した第一七条が正しい。

- [9] ティソ、ビエール＝フランソワ Pierre-François Tissot (一七六八年ヴェルサイユ一八五四年)。若い頃美術を志す。八六年からグージョン (第二章原注 (5) の補注 (*1) を参照) と知己。その妹と一七九三年に結婚し、グージョンが局長を務めていた食糧補給局に勤め、そこでバブーフとも接触があった。共和暦第三年テルミドール末 (九四年八月半ば) に

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀 (五)

は、解散されたジャコバン・クラブ再建を図ったとして当局から追及され、九五年四月一四日から二六日までプレシ監獄に収監されたが、そこで後のバブーフ派に出会った。『護民官』紙を定期購読していたものの、『陰謀』への直接的な加担はない。『陰謀』発覚時に逮捕者名簿に乗せられてはいたが、逮捕を免れた。九八年四月には五〇〇人院議員にフォブール・サンタントワーヌを基盤に選出されるが、翌五月には「フロレアルのクーデタ」によって資格を取り消された。マネージュ・クラブにも参加。

その後紆余曲折を経て帝政を受け入れ、一八二二年に皇帝ナポレオンにより『ガゼット・ド・フランス』紙の運営を任された。文才を活かして多くの文学・歴史書を著し、一三年にはコレージュ・ド・フランス教授に就任し、三三年にはアカデミー入りした。

- 〔10〕 執行評議会 conseil executif。「九三年憲法」はその第六二条から第七四条にかけて執行評議会について規定しており、二四人で構成されることとなっていた。

証拠書類 一五

蜂起公安委員会から人民へ 蜂起文書^{〔1〕}

平等

自由

共同の幸福

フランスの民主派は、人民の抑圧と貧困とが頂点に達していること、また、この専制支配と不幸の状態が現政府の仕業であることに鑑み、

統治者たちによる多数の大罪が、彼らに対して被支配者たちが毎日上げてはきたものの、常に無駄に終わっている不平をかき立ててきていることに鑑み、

一七九三年に誓約された人民の憲法が、人民によってあらゆる美徳の庇護のもとに託されたことに鑑み、

したがって、人民全体が暴政に対する保障手段をすべて失っているときには、もっとも勇敢で大胆な美徳が蜂起の主導権を取り、大衆の解放を指導すべきであることに鑑み、

同じ九三年の時期に承認された人權が、人民全体あるいはその各部分に対し、人民の諸權利を侵害する政府に対し蜂起する權利〔九三年憲法〕の「人權宣言」第三五條をきわめて神聖な權利および免れえない義務として示していること、また、自由を求める人間ひとりひとりに対し、主権を侵害する人びとを直ちに死刑に処すべきであると命じていること〔同前、第二七條〕に鑑み、

陰謀を企む徒党が、自らの個別意思を一七九三年の第一次会において自由かつ合法的に表明された一般意思に置き換えることによって、自由の友すべてに対する迫害と暗殺の後押しを受けつつ、きわめて熱狂的に承認された一七九三年の民主政的協約の代わりに九五年憲法と称される忌まわしい法典をフランス人民に押し付けることによって、主権を侵害してきていることに鑑み、

市民の間に区別を設ける点、市民に対して法律を裁可し、憲法を改正し、集会する權利を禁止し、市民が公務員を選任する自由を制限する点、また、支配者の侵害に対するいかなる保障も市民に残していない点において、九五年の専制支配的法典がもっとも貴重な諸權利を侵害していることに鑑み、

この醜惡な法典の起草者たちは、人民のみが委ねうる権力機関を不当に手に入れて以来、人民に対する不斷の叛乱状態にあること、また彼らが、あるいは自ら、あるいは一握りの徒党分子や人民の敵の力を借りつつ、ある人びとは偽りの名をまとった王〔総裁〕となり、また他の人びとは〔国民に〕責任を負わない議員となっていることに鑑み、

これらの抑圧者が、人民を意気阻喪させるためにあらゆることを行なった後に、自由および民主政がもつさまざまな特性と制度とを踏みにじり、墮落させ、消滅させた後に、共和国の最良の友たちを虐殺させ、自らの残忍きわまる仲間を呼び戻し、庇護した後に、そして、国庫を略奪し、空にし、国民のあらゆる富を吸い上げ、共和国の通貨の信用を完全に失わせ、破廉恥きわまる破綻をもたらし、また、二年近く前から毎日飢えて死んでいる貧乏人の最後のぼろ切れまでも貪欲な金持ちたちに引き渡した後に、これほど多くの罪に満足することなく、専制支配に磨きをかけることによって、不平を言う権利さえ人民から奪ったばかりであることに鑑み、

彼らが、フランス人民の意思や誇りや安全や利益に反する諸条件を規定した秘密条項を含むまい物の和平によって国民を欺きつつ、西部（フランス）の諸県における内戦を続けるためにさまざまな企みを巡らし、助長したことに鑑み、彼らがごく最近になつてもなお、多数の外国人を彼らの許に呼び寄せたこと、また、ヨーロッパの主要な陰謀家たちが反革命の最終幕を完遂するために現在バリに在ることに鑑み、

彼らが、人民に対する彼らの残忍な意図を手助けすることを勇敢にも拒んだ大隊（警察隊の大隊）の兵士たちを解隊させ、ひどい仕打ちを加えたばかりであること、抑圧に抗してきわめて激しいエネルギーを発揮した勇敢な兵士たちに対する裁判を彼らが断行したこと、そして彼らが、この卑劣な行為にさらに、専制支配者たちの意思に対する勇敢な抵抗を王政主義の影響下にあると規定するという卑劣さを付け加えたことに鑑み、

この犯罪的な政府の考えや行動はいずれも国民に対する犯罪なのであるが、この政府による人民殺しの経過をたどり、完全に描くことは困難であり、またあまりにも長くなってしまふこと、これらの大罪すべての証拠は共和国全土に血文字で表現されていること、すべての県から人民殺しの鎮圧を求める声が一斉に上がっていること、抑圧に立ち向かうのは抑圧者たちのもっとも近くにいる市民からなる部分の役目であること、この部分は自由を預かることについて国全体に対して責任を負っていること、また、あまりに長期にわたる沈黙はこの部分を専制支配の共犯者としてしまふことに

鑑み、

最後に、自由の擁護者すべての準備が整っていることに鑑み、

「フランスの民主派は」蜂起公安委員会を設立した後に、彼らの先頭に立って蜂起の責任と主導権とをとり、以下のように布告する。

第一条 人民は専制支配に抗して蜂起する。

第二条 蜂起の目的は、一七九三年憲法、自由、平等そして万人の幸福の回復である。

第三条 今日、直ちにでも、男性市民も女性市民も、三々五々あらゆる地点から、市民たちが一緒に進軍させることとなる隣接カルティエの動きを待つことなく、出発するものとする。彼らは、警鐘および喇叭の音を聞いたならば、次のような記載のある小旗を蜂起委員会が託すこととなる愛国者の指揮のもとに結集するものとする。

一七九三年憲法

平等

自由

共同の幸福

別の小旗には次のような言葉が記されている。すなわち、

「政府が人民の諸権利を侵害するときには、人民にとって、また人民のどの部分にとっても、叛乱はきわめて神聖な権利であり、また免れえない義務である」。

「主権を侵害する人びとは、自由を求める人びとによって処刑されることとなる」〔以上、「九三年憲法」の「人權

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（五）

宣言」第三五条および第二七条」。

人民の将軍たちは、彼らの帽子の周りできわめて目立つように揺れる三色のリボンによって識別されるものとする。

第四条 市民はすべて、自分の武器を携行して、あるいは武器がない場合にはそれ以外のあらゆる攻撃用の道具をもつて、上記〔前条に記した〕愛国者の指揮にのみ従って、各人それぞれの区の中心地に赴くものとする。

第五条 あらゆる種類の武器が、それが存在するすべての場所において、蜂起者たちによって徴発されるものとする。

第六条 市門と河〔セーヌ河〕の流れは注意深く警備されるものとする。誰であれ、蜂起委員会の正式かつ特別の命令がなければ、パリの外に出ることはできない。郵便配達人、食料品運搬人および御者のみが〔パリに〕入ることができるものとし、また彼らには保護と安全とが与えられるものとする。

第七条 人民は国庫、郵便局、大臣官邸、ならびに食料および武器弾薬を保管している公および私のあらゆる倉庫を占領するものとする。

第八条 蜂起公安委員会は、平等のために死ぬことを誓ったパリ周辺に野営する崇高な大隊に対して、いたるところで人民の努力を支援するよう命令を発する。

第九条 パリに避難している諸県の愛国者および降等された勇敢な将校に対し、この神聖な闘いの中で勲功をたてるよう要請する。

第一〇条 人民の権力機関に対する侵害者たる両院および総裁政府は解散されるものとする。それらを構成するメンバーはすべて、人民によって裁かれるものとする。

第一一条 人民の権力を前に〔既存〕権力はすべて消滅したのであって、いかなる自称議員、侵害者たる権力機関のメンバー、総裁、行政官、裁判官、将校、国民衛兵隊下士官も、あるいはいかなる公務員も、いかなる権力行為を行なうことも、またいかなる命令を発することもできないものとする。これに違反する者は直ちに死刑に処せられるもの

とする。

自称立法府のメンバーあるいは総裁は誰であれ、街頭で見つかった場合には、逮捕され、即座にいつもの部署に連れて行かれるものとする。

第十二条 敵対行動はすべて直ちに実力で打ち破られるものとする。敵対者は殲滅されるものとする。

以下の者は同様に死刑に処せられるものとする。

非常呼集をかけるか、かけさせる者、

いかなる国民に属するのであれ、街頭にいる外国人、

大胆にも人目につく行動をとるような、ヴァンデミール（一三日。九五年一〇月五日）の際の王党派による陰謀の首謀者、補佐および指揮官。

第十三条 諸外国から派遣されている人びとすべてに対して、蜂起の間は居所に留まるように、との命令が発せられる。彼らは、人民の保護の下に置かれる。

第十四条 あらゆる種類の食料が公共の広場で人民に提供されるものとする。

第十五条 パン屋はすべて、人民に無料で配られるパンを休みなく作るために徴用されるものとする。彼らの申告に基づいて代価が支払われるものとする。

第十六条 人民は専制的政府の打倒の後にしかな休息を取らないものとする。

第十七条 亡命者、陰謀家 *conspirateurs*、および人民の敵の財産はすべて、祖国の防衛者および貧窮者に遅滞なく配分されるものとする。

共和国全土の貧窮者は直ちに陰謀家の家に住まわされ、家具をあてがわれるものとする。

人民のものであって、公営質屋に預けられている衣類は、直ちに無償で返還されるものとする。

フランス人民は、この神聖な企ての中で命を失った勇者の寡婦および子どもを養子とするものとする。彼らの父母、兄弟姉妹たちで、生活に事欠いている人びとについても同様とする。

共和国全土にいる、断罪され、放浪している愛国者は、彼らの家族の許に戻るための適切な援助および金銭を受けるものとする。彼らは、彼らが受けた損害を補償されるものとする。

国内の専制支配は全体の安寧をもっとも妨げるものであり、自由の勇敢な擁護者であってその専制支配に対する戦いを終わらせるために協力したことを示した者は、武器と荷物を持って自由に郷里に戻ることができる。彼らはそこで、ずっと前から約束されていた褒美を直ちに受けることとなる。

彼らのうちで、共和国に奉仕し続けたいと願う者は、偉大で自由な国民の高潔さにふさわしい形でその場で褒美を受けることとなる。

第一八条 公共ならびに個人の所有地は人民の保護の下に置かれる。

第一九条 革命を終了させ、共和国に自由と平等と一七九三年憲法を与える任務は、蜂起委員会の推薦に基づいて蜂起した人民が選任する、一県につきひとりの民主主義者で構成される国民議会に委ねられるものとする。

第二〇条 蜂起公安委員会は、蜂起が完遂されるまで休みなく活動するものとする。

訳注

〔1〕 この「蜂起文書」には日付がない。しかし、フロレアル九日（九六年四月二八日）に警察隊の二大隊を配置転換する命令、警察隊の叛乱指導者への逮捕令が総裁政府によって出されていた（翌日には三つ目の大隊の配置転換が命じられていた）ことに關する記述と、フロレアル一日（九六年四月三〇日）の政治軍事會議の席上で五人の軍人に提示されたとの記述から判断すると、一〇日から一一日にかけて起草されたと見るべきであろうか。

パリのサン・キュロット民衆から警察隊へ⁽¹⁾

勇敢な兄弟たちよ。

諸君の合図は理解された。諸君の行動は称賛を受け、また諸君の固い決意はわれわれを喜ばせてくれている。新たな〔専制〕支配を打ち砕くべきときが到来したのだろうか。自由は、全体的な抑圧を終わらせる日をわれわれの時代に設定したのだろうか。人民にはその用意ができています。

行つてはならない。諸君はわれわれの許から離れて〔国境方面に行つて〕はならない。行つてはならないのだ。諸君は、わが国の〔権力に忠実な〕従僕たちとグルの、外国の従僕たちの剣に殺されに行つてはならない。それが諸君を待ち受けている運命なのだから。わが国の専制支配者たちは、われわれが六年前から戦つてきている連中と忌まわしい協定を結んだ。彼らは祖国の忠実な防衛者すべてを犠牲としてこの連中に捧げることについて合意しているからだ。わが兄弟たちよ。諸君は真つ先に犠牲となるに値している。諸君が人民の関心を惹いたからだ。諸君が、人民に対する抑圧者のあらゆる侵害に人民とともに抗議したからだ。諸君が、抑圧者が整えている殺戮の準備を目にして、けつして人民に対する虐殺者の一員にはなるまい、という意思を表明したからだ。パリは包囲され、パリは流血の事態と戦火とに見舞われる脅威に曝されている。共和国全体とともに、飢えに見舞われ、無一物となり、品位を落としていることについて文句を言っているからだ。要するに、一握りの暴虐な権利侵害者どもに隷属させられているパリが、諸君にとって同情と激しい関心との対象となったからだ。かけがえのない同志たちよ。われわれを救うかどうか、そして諸君が榮光に包まれるかどうかは諸君次第なのだ。諸君には人民の解放者たちに交じつて主導権をとることができる。そうしてくれ

たまえ。諸君の友や兄弟や妻や親たちは、諸君が向かわされている（国境での）殺戮の場に赴くことを望まず、また彼らを（パリの）城壁の中でもうひとつ別の殺戮にけっして委ねないことを求めているのだ。諸君はすでに、野営地に閉じ込められている諸君の兄弟たちに真実を理解させた。諸君の模範は、彼らを完全に納得させることとなるだろう。外出禁止命令や彼ら以外の人間との接触禁止をすべてものともせず、人民と人民を支配する連中との闘争の中では、正しいのは人民であることを彼らは知るだろう。彼らはまた、殺さねばならないのは人民ではないことも知るだろう。この勇者たちに訴えかけよう。そうすれば彼らもわれわれのところへ来てくれるだろう。人民はどうかと言えば、準備はできている、と人民自身が諸君に繰り返す言う。人民の指導者たちが間もなく人民に合図をする。人民は彼ら指導者に耳を傾けるのであり、人民は諸君の傍に居るのだ。人民に対する専制支配者どもは散り散りとなり、自由が再びその姿を現す。豊かさや幸福とがよみがえるのだ。共和国はいたるところで勝利するのであり、また、共和国がもう押しつぶされることのないように、さまざまな措置が講じられるのだ。

訳注

[1] 八折版三ページからなるこの文書は匿名である。フロレアル九日（九六年四月二八日）との日付が『バブーフ宅押収文書』には付されており、この日付についてはバブーフの筆跡と思われる、との注記がある。Haute Cour de justice, *Copie des pièces saisies* ……, *op. cit.*, p. 34.

[2] 九五年四月五日にはバブーフでプロイセンとの間で講和条約が、また警察隊叛乱の起きた九六年四月二八日には、ビエモンテ＝サルデーニャ王とボナバルトとの間で休戦協定が結ばれていた。

手渡すべき覚書¹⁾

完璧に王政主義者を欺き、準備されつつある運動の中でわれわれの真の意図について彼ら王政主義者を騙すことが、恐怖政治家やジャコバン派や徒党分子やプレリアル（第二章訳注〔2〕を参照）等々といった月並みな罵詈雑言を王政主義者ならびに政府がわれわれに浴びせることのないようにする上で、いかに重要であるかを確信している私には、皆の帽子に白墨で「人民の軍隊。専制支配者打倒」と記さねばならないように思われる。

また、三種の旗が振られることとなるのであるが、それらには「人民の軍隊。専制支配者打倒。人民の報復」と記される。私にはこの手段は、われわれの敵そのものをわれわれの計画のために役立てるのにきわめて適していると思われる。芝居小屋で「専制支配者どもよ、震え上がるがいい」という言葉に送られる拍手喝采によってこのことを判断していただきたい。民衆派 *parti populaire* にとって勝利が決定的となるとときには、「一七九三年憲法。共同の幸福 *bonheur commun*。人民の勝利。等々」と記された旗を大げさに、しかもまるで天空から舞い降りてきたかのように出現させることが必要になるであろう。

何度も何度も繰り返される拍手喝采の中で、諸君は蜂起がひとりでにその本来の目標に向かって進むのを目の当たりにするであろう。

まさにこのようにしてはじめて、われわれは、すべての人の努力を共同の敵に向け、公衆の憎悪を確実に利用し、行動を開始する際にきわめて有害な存在となりかねない王党派の妨害を避けることを期待しうるのである。

訳注

〔1〕 エディシオン・ソシアル版はこの文書名に「王党派の利用価値に関して」という副題を付しているが、十分に当を得たものとは思われない。筆者および時期については不明。

証拠書類 一八

山岳派委員会の使者に対する演説^{〔1〕}

同志諸君。諸君は人民の諸権利を回復するために幾人かの民主主義者が払ってきている努力をご存知であろう。

諸君は、われわれが断罪と処刑を通して、人類の神聖な大義を主張するための十分な勇氣と大胆さとを身につけたこと、そして、今日にいたるまで、専制支配への反対党派を形成するためにあらゆる危険に立ち向かってきたことをご存知であろう。

ヴァンデミエールの時期（九五年一〇月五日以後の時期。第二章訳注〔36〕を参照）に、われわれは、当然受けるべき措置として専制支配の手で閉じ込められていた監獄から出たのだが、それは再び専制支配を非難攻撃するためでしかなかった。（しかし）そのとき、聖なる火は消えていた。人民大衆は王政主義化されていた。また一部の愛国者は、獄中で打ちのめされ、疲れ果て、士気が低下していて、監獄から出られたことを非常に喜んでいた。（しかし）獄中で打ちのめされていない場合にも、愛国者たちは残虐で権利侵害者たる政府と妥協し、その政府のために尽くしさえし、その政府の政策を容認する気になっていたのである。依然として自由の名に値する幾人かが、そうした妥協は不名誉かつ恥すべきことであると彼らに指摘したが、彼らの大部分はいっそう恥すべき何ごとかによってその言い訳をしていた。

すなわち彼らは、自分たちには魂胆があり、また、敵と仲良くするのは、十分に強力になったときに敵を押さえ込みうるように、敵の信頼を巧みに手に入れるためにすぎない、と述べていたのである。

われわれは、犯罪に対する美徳の戦いをより誠実に行なうことを望んでいた。われわれはまた、その犯罪を真正面から非難し、美徳を招き寄せ、共和主義者たちに対し彼らによりふさわしい役割を演じさせ、彼らに当初の誇りを取り戻させ、人民を王政主義から引き離してもいた。またわれわれは、極悪人どもが人民を追い込んだ悲惨な状態であるのに、その状態は共和制のもたらした結果であると彼らが人民に信じ込ませていた、誤った見解について人民の目を覚まさせていた。われわれは、そうした見解とは逆に、王政主義の残虐な思い出と、完成されていたら最大限の幸福をもたらしているはずの共和政の機構が傷んでいることの結果であることを、人民に対して明示しえていた。

われわれには、以上のような教化を通じて目差していた目的をはたすという利点、すなわち、愛国者たちと人民大衆とに対し、現政権を打倒し、その政権をフランス人が勇敢にも着手した偉大な革命にいつそうふさわしい政府に置き換える気にさせるという利点があった。

われわれは、自分たちの目的を達成するには革命的な新聞だけでは不十分であることに気づいていた。もう数ヶ月も前のこと〔九五年一〇月末に総裁政府が成立して以後〕、われわれは、幾人もの勇敢な民主主義者を委員会に結集すべきであり、蜂起を目差して組織されるべきであり、また、われわれを軸に蜂起を成し遂げるために必要なすべてのことを組織化するべきであると考えた。

そのためにわれわれは多くのことをやってきた。〔その結果〕われわれは、材料の大部分を集め、かくして、目的を達成するのに必要な措置をほすすべて準備しえた、と思っている。

われわれは、武器弾薬が存在する場所について、また、武器弾薬を奪い取るための手段についての情報をもっている。われわれはバリ中の愛国者や気骨のある人物の名簿を手にしており、また、最初の合図によって人民を立ち上げらせ

るさまざまな手段をもっている。

われわれにはさらに、全員が行動する気になっている、民間工作員および軍事工作員の組織がある。われわれは、われわれの蜂起宣言をすっかり印刷してある。

〔要するに〕蜂起はまさに勃発せんとしていたのである。しかしそのとき、われわれの許に届いた情報とわれわれに對してなされた批判が、幾つかの点について真剣に考察することをわれわれに迫ることとなった。

われわれは諸君にごく率直に語らねばならない。すなわちわれわれは、この蜂起を行なうにあたって、さまざまな国民議會〔憲法制定國民議會、立法議會、國民公會〕に属していたものすべてを抜きにして行なうことに決めていた。あらゆる徒党と無縁であり、また人民のためにのみ活動しているわれわれは、人民の完全な再生にとって有害となる場合には、かつての情念やかかつての偏見がもたらしかねないものすべてを人民の政府から遠ざけるほかありえない、と考えていたのである。

諸君、いささか強烈に真実を表明したことを許していただきたい。それは常に、われわれが極度に率直であるせいなのだから。われわれは、人民から受けた任務の面で義務を完全には果たさなかったとして山岳派を非難していた。またわれわれは、命にかけて人民の諸權利を擁護しようとはしなかったとして山岳派を非難していた。

われわれがさらに恐れていたのは、山岳派をもう一度立法の指導的位置に呼び戻すことによって、彼らの大部分が相変わらず頭の中に種を残しているかつての議論が当然にもたらす、喧嘩や分裂が再び生じることであった。

要するにわれわれは、彼ら山岳派がなくても、すべてを、しかもより上手く行ないうると確信していたのである。

〔ところが〕これとは反対の事態の証拠を手に入れたとは言わないまでも、少なくとも根拠にもとづいてそうした事態を推定するにいたった、とわれわれはここ数日來思っているのであり、われわれは祖国の破滅という危険を冒すことを望まなかったのである。

われわれには幾つもの提案がなされてきているが、その中でわれわれは、諸君としてもわれわれと同じ考えで活動していることから、諸君がわれわれの努力と提携することを望んでいる、ということを知られた。

われわれは、諸君の措置とわれわれの措置とがぶつかり合い、妨害し合うこと、そして、必要なので述べておくが、決定的瞬間に諸君がわれわれの計画を妨害するようなこと、また、人民を擁護するさまざまな部隊が対立状態に陥り、共和国がさまざまな種類の敵すべてに対して持ちこたえねばならないすべての戦争にさらにそれらの部隊の間での戦争が付け加わることを恐れただけになおさら、この提案を受け入れることに決めた。こうした不幸な事態とそれがもたらす結果とがわれわれに強い危惧を抱かせたからだ。われわれは、諸君と提携するにあたって、それらを未然に防ぐ決心を固めた。われわれは、諸君にこの決心を伝えるために諸君を呼んだのだ。それが諸君の意に合うこと、われわれが十分に一致を見ることができると、人民を救い、人民を専制支配から救い出すためにわれわれのもつさまざまな手段をうまく結集し、結びつけること、以上のことをわれわれは願っている。この好都合な目的を達成するために、すべてを忘れるようではないか。

訳注

〔1〕本文中にも記されているように、この演説は共和暦第四年フロレアル一五日（九六年五月四日）午前になされた。本資料には署名がないが、『バブーフ宅押収文書』では「バブーフの筆跡と思われる」との注記がある。Cf. Haute Cour de justice, *Copie des pièces saisies*……, op. cit., p. 63.

証拠書類 一九

公安総裁府から一二区の工作員へ

パリ、共和暦第四年フロレアル一八日〔九六年五月七日〕

同志諸君。

かつてわれわれの陰謀ほどその動機と目的の点で崇高であった陰謀はない。また、神聖な預かり物として寄せられた信頼にこれほど相応しい態度を示した工作員たちを擁する陰謀もかつてなかった。われわれほど長期にわたって、不実な政府に反対して巧みに極秘活動を行なった者はかつていなかった。政府の飽くなき監視が、どれほど脳みそを絞つても、また、どれほど残酷な取調べ手段を尽くしても、政府はいまだに確実なことを何ひとつ察知していないのである。こうした結果はわれわれが諸君を選んだことの誇りとなっており、今日までわれわれが諸君に寄せてきた信頼よりもはるかに大きな信頼への保証を、もしそうした信頼がありうるとすればではあるが、われわれに与えてくれている。諸君のような人びとにはもはや慎重な配慮は要らない。諸君は、われわれ自身が行っているように、われわれの心の底を読み取らねばならないのであり、また、われわれは諸君に真実を全面的に語らねばならない。

〔準備の不十分さ〕

数日来、われわれの側からの諸君との連絡が活発でなくなっている。それまでよりも、確固とした調子が弱まり、断固としたものでなく、動揺している。ある種の怠慢や無気力や優柔不断がわれわれの活動に表れているように諸君には見えたにちがいない。しかしいかなるときにそれらが表れたのであろうか。いっその力強さを発揮しなければならな

いように思われていたときに、である。しかもそのとき、愛国者たちと人民大衆は大きな叫び声を上げて闘争を要求していたのであり、また、状況は彼らが闘争に勝利する可能性を大いに提供しているように見えていた。これ「工作員宛てのこの通達」によって諸君は、それでもわれわれの行動が正当化されるものなのかどうか、判断を下しうるのである。もしわれわれの活動が正当化しえないなら、まず諸君が、次いで諸君に精神を指導されている愛国者全員が、彼らを指導する任にある人びとさえも永遠に非難し、罰しなければならぬ。

われわれは諸君にこう述べるだけでよいであろう。すなわち、われわれの攻撃手段を一瞥してみると、それらの手段が不十分であると思うに足る正当な理由があったのであり、またそれゆえ、民主派殲滅の合図ともなりかねない愛国的な高揚を中断させることがわれわれのきわめてはっきりとした義務となった、と述べるだけでよいであろう。しかも、共和主義者はジェルミナルとブレリアールの恐ろしい教訓を常に念頭に置くべきであり、また彼らを永遠に失うにはもはやこうした教訓はいま一度しか必要としなかったであろう。それだけに、愛国的な高揚を中断させることはいっそうはっきりとした義務だったのである。

〔権力移行上の問題〕

〔しかし〕これが、われわれを中断させた唯一の理由なのではない。われわれは、蜂起に際しては断固として行動しなければならぬこと、いわば非常に無謀にならねばならぬことをわきまえている。これこそが、主として、われわれの側からの明白な遅延を引き起した理由なのである。

諸君も知っているように、この蜂起が最後のものとなること、それがついに人民の幸福をもたらすことをわれわれ全員が望んでいる。われわれは「したがって」、こうした結果をいっそう確実なものとしうるあらゆる措置を予め講じなければならなかった。そこでわれわれは、蜂起を宣言することとなる声明書が、最初の恩恵として、つまり、われわれ

が人民に提供するつもりでいる至福状態のほんの前提として、例えば、繰り返しになるが、この声明書はまず、陰謀家すべての財産の貧窮者への配分を保証することを望み、次いで、貧窮者が陰謀家の家に住まわされ、家具をあてがわれる、等々のこと〔証拠書類 一五 蜂起文書「第一七条」〕が決められることを望んだ。こうした変革および同じように好都合な変革が実行されうるためには、権力が、それを掌握している極悪人たちの手から離れた後に、真の、純粹で完全な民主主義者たち、人民に属する人びと、とりわけ人民の友たちの手に移行することが保証されねばならない。ではどのようにしてその権力を彼らの手に移行させるのであろうか。これこそが、われわれに中断を迫り、今もなお中断させている障害なのである。つまり、この微妙な点についての議論ゆえに、われわれにとって貴重なものとなりえ、またわれわれが始めた戦いの成功を決定的なものとした、幾つもの利点をわれわれは失わざるをえなかったのである。戦闘に勝利しても、その勝利を確実に利用するのではなければ、何の意味もない。

それゆえにこそ、われわれは最初の声明書〔証拠書類 一五〕を三万部印刷したのであり、その中でわれわれが明らかにしたのは、公安総裁府は、現在の専制支配的な権力機関を、公安総裁府自身が提示し、人民による承認を受けるとされる名簿に掲載されたきわめて精力的かつ確実な民主主義者の中から選任される、一県につきひとりのメンバーで構成される国民議会に置き換える、ということであった。この議会が、蜂起総裁府と一致協力しつつ、革命を終了させ、万人の幸福を保証する任務を担うものとされた。

〔山岳派委員会との協議〕

それに加えて、多くの理由からわれわれは、元山岳派で、一七九三年憲法への違反にまったく加担しておらず、暴力によって放逐されたにすぎない被追放議員たちを呼び戻すことによって、われわれがより強力になり、またより勝利を確信しうるようになる、と思うにいった。われわれは、民主派の見解によれば、これらの人びとは人民が解任したの

ではまったくなく、したがって依然として存在する合法的な権力機関を構成している、とされている点を検討した。しかしながらわれわれは、まず、テルミドール九日以来、反動政治を行ない、反動政治を放置したこと、民主政の機構が次々と、反対も受けずに破壊されるのを放置したこと、〔共和暦第三年〕メシドール五日〔九五年六月二三日〕にボワシー・ダン格拉斯が登壇し、彼の提案にかかる人民殺しの法典〔九五年憲法〕を採択させた際に、一言も発言しなかったこと、それ以後臆病にもこの忌まわしい侵害に公然と抗議することがまったくなかったこと、最後に、とんでもなく卑劣なことに、権利を侵害し抑圧的な政府の諸任務を大部分受け入れたこと、以上のことから、公会議員のこの部分がそれ以外の部分とほぼ同じくらい罪があり、また、〔九三年憲法に〕違反してもいたことを十分に承知していた。しかしわれわれは、後になってから諸君ならびに人民に対して説明する強力な理由から、一時これらの事情に目を閉ざすことを余儀なくされ、また、祖国が苦しんでいる耐えがたい隷属状態から祖国を救い出しうるにはおそらくは不可欠であると思われる人びとを利用するために大きな犠牲を払うことを余儀なくされた。したがってわれわれは、彼らを利用することに決めた。しかしそれと同時にわれわれは、新たな専制支配の下で再び彼らに支配されてしまうことのないよう、人民を保護するための措置を講ずることを望んでいた。そこでわれわれは、公会の中でそれほど腐敗していない残存議員たち、すなわち六八人ほどの被追放組を復権させること、また、われわれおよび蜂起した人民による選任を通じてきわめて精力的かつ断固とした一県につきひとりの民主主義者一〇〇人以上からなる抵抗戦線として彼ら残存議員たちに対して配置されることとなる追加メンバーを彼らに對する歯止めとすること、加えて、人民全体が完全に幸福になり、平穩になるまでは、われわれは蜂起公安委員会という名称と権限とを保持すること、以上の点で意見の一致を見た。

こうした目的でわれわれは元山岳派と協議を行なった。彼らはあらゆる条件を受け入れ、あらゆる手段でわれわれを支援することを約束していた。その結果、新たな声明書が五万部印刷されたのであり、われわれは実行に移りうるころだったのである。

同志諸君。諸君は信じられるであろうか。これらの公会議員たちが意見を変えたのであり、彼らが行うと予想される専制支配を防ぐための保証を、もはや愛国派に提供したくないことをわれわれに告げにやってきた。彼らは、一県につきひとりの民主主義者を彼らに付け加えることにもはや同意しない旨、すなわち、彼らは別の抑圧に置き換えるためにひとつの抑圧を打倒したがっている旨、彼らによる抑圧を樹立するために今日の抑圧を打破したがっている旨、われわれに告げにやってきたのである。

彼らの主張はお粗末きわまる詭弁をよりどころとしているのであり、また彼らは、われわれが素晴らしいと思っている唯一の理由をほぼ無視している。その唯一の理由とは、人民による支配をきわめて強固に確立するためにのみ、われわれは悪党どもによる支配を打倒しようと望んでいる、という理由である。

諸君。率直に言って、以上がわれわれに中断を迫った理由である。われわれは今もなおそのままの状態にある。これら立派な [honnetes] 「証書類 一四」の訳注〔2〕を参照。山岳派はわれわれの行動を妨げている。しかも彼らは、彼らの野心との関わりであれ、彼らの傲慢さとの関わりであれ、その代償について議論している間に、祖国が永遠に破壊する危機に曝されるかどうかなど気にかけていない。〔しかし〕繰り返し述べておくが、残念なことに、現時点では諸君に説明しえない事情から、われわれには彼らなしで済ませることはほぼ不可能なのである。

〔結 び〕

この通達の結論は、諸君に次のように伝えることである。すなわち、可能であれば、「上述のような事情がある」にもかかわらず、われわれは彼らなしで済ませるであろうということ、また、彼らなしで済ませられなければ、彼らが依然としてわれわれに対して行ないかねない悪事を予防するように、彼らの拒否する歯止めを彼らに対してその意に反しでも設けるように、人民を指導しなければならなくなる、ということを諸君に伝えることである。

人民はわれわれを無氣力だと責めている。何がわれわれを妨げているのかについて、われわれが諸君に対して話したようにには人民に語りえないのは何と残念なことであろうか。わが人民的な文筆家でさえ、そのようにしたならば必ずやきわめて重大なことを危険に曝すこととなる。われわれにとって実に厄介な状況の中では、諸君にのみ打ち明けたばかりのこまごました事実のすべてを愛国者たちに伝達することによってではなく、彼らの指導者たちは相変わず信頼に値することを彼らに請合うことによって、また、辛抱強く待つように説き、そしていずれにせよあとほんのわずかな日数の間我慢するだけでよいのであって、彼らの精力を維持するように説くことによって、少なくとも、愛国者たちの目を覚まさせていただきたい。

命を失うべきか、それとも勝利するべきか、そのどちらかである。わが専制支配者たちが用いており、また用いることになる無数の手段のひとつによって殺されるのを待つよりは、名譽のために闘う中で死ぬ方がましである。

したがってとにかく、あとほんのわずかの間、決定的瞬間を待っていたきたい。諸君がわれわれの傍に山岳派の残存分子たちの姿を見かける場合でも、また見かけない場合でも、もはや少しも不安を抱かないでいただきたい。そうではなく、蜂起の好都合な効果を確実なものとすることを目差して、復活した公会に対して人民の意思を通告するために、また、遂行すべき全面的再生の成就を保証するべく、形骸化した公会とは別に設置されることを人民が望むものを直ちに要求するために、復活した公会の審議の場に蜂起委員会が赴くこととなるとときには、蜂起委員会を大量の人民勢力で取り巻くという指令を、諸君に対するきわめて重要な指令のひとつとして覚えておいていただきたい。

追記。諸君が小旗を用意しているかどうか、直ちにわれわれに伝えていただきたい。これは細部にわたる点ではあるが、重要な点なのである。

注意事項。「フロレアル」一八日〔九六年五月七日〕午後九時。われわれが繰り返し山岳派に主張してきた急を要する議論に山岳派が従う、このことをわれわれはたった今知った。彼らは、われわれが望んでいることすべてに最終的に同意しているのである。それゆえ時はこの上なく切迫している。本通達の中の、蜂起委員会の後に続く、人民の一致行動に関する結論は、繰り返し言うておくが、相変わらず有効なのであり、また蜂起委員会が諸君に求めている措置はとりわけ諸君に強く勧められている。

原注

(1) 以上三つの非難は、これほど一般化されると、私には誇張であると思われる。

訳注

〔1〕 この文書はやや長いことから、訳者の判断で中見出しを付しておいた。最終稿が完成したのは九六年五月七日午後九時以後のことであり、筆耕ピエの手で書き写された後に、工作員たちに配付された。なお、エディシオン・ソシアル版には「蜂起を遅らせている障害について」という副題が付されている。サイッタら編の『目録』では「バプーフの原本」に基づいてピエが筆写、との記述がある。 Cf. Saitta et al., *Inventaire des manuscrits et imprimés de Babeuf*, op. cit., p. 40.

〔2〕 次号に掲載予定の「証拠書類 二二「新たな蜂起文書」」を参照)

〔3〕 前日(五月六日)の夕方、リコール宅でタルテも出席した山岳派の会議において、山岳派はアマールとランデの発言によって立場を修正し、譲歩した。